つなげよう
感謝の歩み

第134周年

甲府中学・甲府一高
同窓会

あなたの、いちばんメディア。

山日YBSグループのシンボルマークです。
もっともっと、ドキドキさせたい！ワクワクさせたい！
その「！＝ビックリマーク」をモチーフに、
S（山日）とY（YBS）のどちらでもイメージさせる
ユニークなフォルムです。
「あなたの、いちばんメディア」をスローガンに、
次から次へ、新鮮な驚きと、新しい感動を、
お届けしてまいります。

Sannichi YBS Group

山日YBSグループ

甲府市北口2-6-10（〒400-8505）
電話番号案内 055-231-3000

山梨日日新聞社
山梨放送
アドブレーン社
サンニチ印刷
YBS T&L
山梨ニューメディアセンター
タウン企画
山梨文化学園
日本ネットワークサービス
デジタルデビジョン
ファーストビジョン
ウインテック コミュニケーションズ
新聞センター
山日リース
山梨文化会館

つなげよう感謝の歩み

第一三四周年甲府中学・甲府一高同窓会

目次

甲府中学校校歌・甲府第一高等学校校歌・応援歌 …… 2
ご挨拶　甲府中学・甲府一高同窓会会長　金丸信吾 …… 4
　　甲府第一高等学校校長　赤池　亨 …… 5
　　第一三四周年甲府中学・甲府一高同窓会実行委員長　吉澤直人 …… 6
特集　強行遠足　復活！　小諸!! …… 7
恩師寄稿 …… 14
なつかしき声 …… 21
特集　みんなで綴る私達の一高 …… 22
広告目次 …… 41
広告（広告ページ1～94）
第一三四周年甲府中学・甲府一高同窓会協賛者ご芳名 …… 140
第一三四周年甲府中学・甲府一高同窓会学年協賛者氏名 …… 141
第一三四周年甲府中学・甲府一高同窓会実行委員会組織 …… 143
編集後記 …… 144

甲府中学校校歌

一、我等は日本に生まれたり
神の御代より一系の
皇統戴く我国に
生れしことのうれしさよ
皇国の栄えは天地と
共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる
甲斐の国あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の務め軽からず
見よや南に富士ヶ嶺は
皇国の鎮めと聳えたり

三、大海原の揺りやまぬ
波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇国を諸共に
国民挙りて国のため
撓まず萎縮まず辟易がず
進むぞ大和ごころなる

甲府第一高等学校校歌

一、甲斐の国　み中に建ちて
古へゆ　雄心伝へ
新しき　世の鑑とし
勉めてむ　この学舎に

二、日に新た●また日に新た
弥高き　のぞみをもちて
真なる　理究め
励みなむ　若人我等

三、聳えたつ　芙蓉のたかね
清き哉　甲斐の山川
もろともに　玉と磨きて
賛くべし　天地の化育

起て撃て勝て

起て撃て勝て
甲府一高　一高
その名ぞ我が母校
仰ぐ芙蓉の峰さやか
穹天まさに轟かむ
見よ精鋭の集へるを
結べる眉に必勝の
誓ひは固しわれらが精鋭
おお
起て撃て勝て
甲府一高　一高
その名ぞ我が母校

希望の光

一、希望の光　身に浴びて
若人の意気負うて立つ
いま選手等の門出を
空もとどろに　応ふらん

二、敵軍いかに　猛くとも
忍び伏せたる梓弓
鍛えし腕引きしぼり
敵のかぶとを　射落さん

三、見よ穹天の　雲は垂れ
覇権を握るは今なるぞ
蚊竜の意気胸に秘め
いざや起て起てわが選手

鶴城に

一、鶴城に桜花咲き
人は皆歓楽に酔ふ
われ一人落花を浴びて
前の恥花園に泣きぬ

二、秋来る健児の胸に
強き意気宇宙も空し
桜花の旗ひとたび振れば
醜の群れ微塵に飛ばむ
ヤッツケロ ヤッツケロ
ヤッツケ　ヤッツケ
ヤッツケロ

使い方は21ページを
参照してください

変らぬ友情に感謝をこめて

甲府中学・甲府一高同窓会
会長 金丸 信吾

平成二十六年度の甲府中学・甲府一高同窓会の総会、並びに懇親会に御出席いただき、誠に有難うございます。心から歓迎いたします。

又、平素からの同窓会運営に対する同窓生の皆様の心温まる御協力、力強い御指導にも心から感謝と御礼を申し上げます。

私達の母校甲府中学・甲府一高は、時に名称は変りましたが、明治、大正、昭和、平成の時代を歩んで来た、本年で創立百三十四年を迎える県内で最も長い歴史を誇る名門校であります。多くの先輩達が築き上げて来たこの伝統と歴史は、我々同窓生の誇りであり、又、自信となって、同窓生一人一人の日々の生活の心のよりどころとして、脈々と受け継がれています。

本年度同窓会のテーマは、この精神を忘れず『つなげよう感謝の歩み』であります。

すべての同窓生が、母校へ、恩師へ、先輩・後輩へ、そして友人への感謝の気持ちを忘れず、これからも共に歩んで欲しいとの願いを込めたテーマだと思います。

現在、三万人を超す甲府中学・甲府一高の同窓生が、国内はもとより海外においても、各界、各層の指導者として、又、新しい力の中核として活躍しています。同窓会の総会、それに続く懇親会は、これらの皆様が年一回一堂に会し、語り合い、旧交を深めながら、母校の更なる発展の為、今我々は何を為すべきかを考える重要な集いであります。

又、本会においては、同級生との横の繋がりだけでなく、先輩・後輩との縦の絆を深めて欲しいと願っております。

そして、その中から、今母校甲府一高が掲げる『文化の香りのする懐の深い進学校』という目標が達成出来るよう、同窓生各位の今まで以上の御指導と御協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

最後に、本年度総会の為、一年間に亘って大変な御努力と御苦労をいただいた、吉澤直人実行委員長を中心とする昭和五十七年卒と平成十一年卒の当番幹事の皆様方に、心から敬意を表し、感謝を申し上げます。

尚、本年度総会をもって、永年同窓会の為に献身的な御尽力をいただいた大西勉事務局長が退任されました。甲府一高同窓会の生き字引と云われた方の退任は、誠に残念ではありますが、大西事務局長の母校、同窓会に対する熱い思いをしっかりと受け継ぎ、これからも一歩一歩前進していきたいと思っております。又、新事務局長には、昭和四十三年卒の金子寛氏が就任いたしましたことを、御報告いたします。

同窓生各位の益々のご繁栄と甲府一高同窓会の更なる発展を願い、

〝感謝をこめて〟。

ごあいさつ

甲府第一高等学校
校長　赤池　亨

平成二十六年度甲府中学校・甲府第一高等学校同窓会総会が、「つなげよう感謝の歩み」のテーマのもと、盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

同窓会の皆様方には、常日頃より母校や後輩のために物心両面にわたる御支援を賜りまして、心から感謝申し上げます。中でも、日新基金につきましては、生徒の自主性や創造力、企画力を育む上で大変有効であり、四回目となった昨年度は、「歌の架け橋～ロサンゼルスコンサート～」が採択されましたが、これはア・カペラ部の生徒たちが歌を通して日本や山梨の魅力をロスの方々に伝えるだけではなく、震災の復興への祈りと感謝の気持ちを表現することで国際交流を深めるという企画でした。その様子は、山梨日日新聞等に掲載され、本校のイメージアップにも繋がったと思います。

さて、母校の現況について簡単に紹介しますと、平成二十五年度の卒業生は、約八〇％が四年制大学へ、短期大学及び専修学校等にそれぞれ約五％と進学しました。また昨年度の部活動の状況は、男子テニス部、男子アーチェリー部と女子山岳部、女子弓道部がインターハイへ、美術部、新聞部、囲碁将棋部、箏曲部が全国総文祭へ出場を果たしました。特に県高校総体で、女子が二十四年ぶりに県下総合六位（県立校ではトップ）に入賞したことは特筆されます。

次に、強行遠足については、皆様方の御理解と御協力を得て、念願の小諸復活となりましたことに、心から感謝申し上げます。特に昭和五十二卒から昭和五十七年卒の方々には、一昼夜にわたって検印所を担当していただきました。この紙面をお借りして、御礼申し上げます。なしとげた生徒たちの顔は、笑顔あり、涙あり、悔しさありと様々でしたが、大人の顔になってきたと感じました。今回は、ＹＢＳ、ＮＴＶ、ＮＨＫ甲府、同名古屋の四つのテレビ局が生徒に密着して報道し、また朝日新聞全国版の教育欄に八回にわたって連載されたことから、その反響も大きく県内をはじめ全国の方々からお電話やお手紙などを頂戴しましたが、そのほとんどは賞賛や共感、励ましなどで大変ありがたく思っております。

今後も、これからの社会で求められる豊かな教養を基礎に多くの付加価値を身に付け、世界や日本及び地域においてグローバルに考え行動できる人材の育成に努めることが本校の使命と考え、山梨県のナンバー・スクールとして、更なる飛躍をと考えています。

結びに、同窓会の皆様方には、今後とも変わらぬ御支援、御協力をお願いするとともに、益々の御発展と御健勝を祈念しまして、ご挨拶といたします。

つなげよう感謝の歩み

第一三四周年
甲府中学・甲府一高同窓会
実行委員長 吉澤 直人

本日は、第一三四周年甲府中学・甲府一高同窓会に、ご参加いただきまして、まことにありがとうございます。

甲府中学・甲府一高の卒業生が、このように一堂に会し、会場全体が、みなさまの笑顔で溢れましたこと、我々当番幹事にとって、まことに幸せなことでございます。

母校の脈々と続く伝統の一翼を担い、受け継いだ法被を、さらに次の代につなげていくことは、まさに「喜びの連鎖」。そして、それは、同時に、母校に対する「感謝」の念そのものであるとずっと感じて参りました。

そこで、昭和五十七年卒と平成十一年卒とがタッグを組み編成した、我ら実行委員会が、選びましたのが、今回のテーマ「つなげよう感謝の歩み」であります。

この一年間、我々は、何度も何度も「ありがとうございます」の言葉を発し、本日開催の同窓会を目指して参りました。そして、みなさまからは、「頑張れよ」の声を何度もかけられ、勇気づけしていただきました。本日、ここに、お集まりのみなさまから、お一人でも多く、もし、「ありがとう」のお声を、さらにかけていただけますのなら、我々の活動は報われ、「感謝の歩み」に参画した誇りになるものと確信いたします。

「ありがとう」と「ありがとう」の掛け合いこそ、人と人とを結ぶ心の絆であり、平和の基礎となるべきものであります。一三四年に亘る母校の大いなる流れは、この「感謝の歩み」に表象され、これまでずっと在ったものであり、そして、まさに、今、ここに顕在するものであり、この先も、存続して行って欲しいと願う流れであります。

幾多の天変地異、そしてグローバル化を迎え、より複雑になりつつある世界の政治・経済状況を考えてみますと、こんな浪漫派的な抽象論では、スマートな結果を出せないことは、重々承知。そして、この先、母校でさえ、希望的観測で論じられるほど順風満帆とばかりは行かないことでしょう。

しかし、いかなる時代となろうとも、甲府中学・甲府一高同窓生の心から、母校への絆が消えることはなく、笑顔で集う同窓の輪も去ってしまうことはありません。その意味でも、本日の同窓会が、みなさまがたの心に一筋の光明を点し、それぞれの人生の糧となっていただければ、当番幹事として、この上ない幸せであります。

最後になりましたが、本日の同窓会開催にあたり、記念誌の広告へのご協賛、さらには、チケットの販売にご協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げ、実行委員長としての挨拶とさせていただきます。

本日は、まことにありがとうございました。

特集 強行遠足 復活! 小諸!!

第八七回強行遠足が、平成二五年一〇月五日、六日開催された。男子のコースは一一年ぶりに小諸までの一〇五・七kmに変更された。女子は高根から小海までの四三・二km。男子は二四時間、女子は九時間制限である。

新しいコースは歩道整備された道路通行を原則にし、コース延長に伴い一九ヶ所の検印所・給水所、道中の交差点など約一七〇ヶ所に約九〇〇名の協力員を配置するなど、生徒の安全確保の徹底に努めた。信号機のない横断歩道には警備員を配置した他、医師・看護士を各救護所に配備、六病院に協力依頼し、緊急時に備えた。

また、昭和七年から強行遠足を実施している北海道立北見北斗高校とは、平成四年から交流しており、今回も四名(男子二名、女子二名)が参加し健闘した。

最近のコースの変遷

平成一四年、生徒の交通事故の翌年に男子は野辺山までの五三・七km、女子は須玉—野辺山三一kmに大幅短縮された。平成二〇年に、男子は小海までの七五kmに、また平成二四年には女子が高根—小海の四三・二kmに復活。そして、平成二五年、一一年ぶりに男子が小諸終点、一〇五・七kmになり、強行遠足が完全復活した。

平成２５年度版第１号　　強行遠足新聞　　平成２５年９月６日

強行遠足新聞

発行所
甲府第一高校
生徒会係
平成２５年度版
第１号

されど…遥かなる小諸
～感謝と勇気～

校長　眞田　正直

本校最大の伝統行事である第87回強行遠足が、来る10月5～6日に実施されます。今年は、男子の最終地点を小諸までとしました。あの許すことが出来ない不幸な交通事故から11年の歳月が流れました。当時、私は教育委員会におりましたが、この伝統行事が存続か否かといった論点で新聞やTVで報道されていたことを覚えております。

その後、教頭として本校へ赴任し、当時の詳細な経緯を知りました。それは、御遺族をはじめ当時の生徒や先生方のいつの日にか小諸へといった思いが確認されていたということです。男子も女子も最終地点が野辺山となってから、殆どの生徒が到達していました。そこで、平成20年から男子を小海まで延伸し、昨年から女子も小海までとしました。男子は小海まで伸ばして5年が経過し、昨年度は7割の生徒が小海に到達し、機は熟したと感じました。昨年度の強行遠足終了後、小諸までの可能性を探る準備を始め、何十回も体育振興係を中心に長野を訪れ検討を重ねてきました。そして今年に入り、生徒をはじめ先生方、保護者や同窓会の方々へ説明を重ね、さらに準備を本格化させ、あと二ケ月となりました。

さて、昨年この紙上で、この行事が「何のために」実施されているのかを書きました。ある生徒は、「校長先生が言った答えを自問しながら小海まで行ったが、分からなかった」と書いてくれましたが、本当に素晴らしいことだと思います。今理解できなくてもいいのです。5月の山梨日日新聞に載った人類学者中沢新一さんは「体に強い負荷をかけることが、人の心の深いところに作用する」、また、記事をまとめた本校OBの記者もその答えを「人生をかけて考える宿題だ」とコメントしていました。これは、「なぜ、我々は歩くのか」と同様にそれぞれがそれぞれの答えをそれぞれの時に分かっていくものと考えています。

結びに、心がけて欲しいことが二つあります。まず、強行遠足は保護者や同窓会の皆さんや検印所を提供してくださる方々、その他管内警察、医療機関等、多くの方々の協力があってはじめて実施できているということです。一人一人がこれらの方々への感謝の気持を常に忘れずに、安全第一に歩き通して欲しいと切に願っています。もう一つは、自分の身は自分で守らねばならず、やめる勇気もまた大事だということです。皆さんのそれぞれの旅路の無事を祈っています。

【強行遠足の成功を祈り、校舎に垂らされた懸垂幕（第65回大会記録写真より）】

第87回強行遠足
開催まであと1ケ月

第87回強行遠足は、10月5、6の2日間にわたって実施される。昨年、女子のコースが43・2㌔に延長されたのに続き、今年は男子のコースも105・7㌔に延長される。2002年の第76回大会中に起きた痛ましい事故を受けて距離を短縮して以来、11年ぶりの小諸コース復活となる。

男子は5日の13時に学校に集合して14時に出発、翌6日の14時までの24時間が制限時間になる。一方、女子は6日早朝5時に学校に集合、バスに分乗して高根総合支所に移動する。そこから7時に出発して、16時までの9時間以内に小海のゴールを目指す。

万全な準備で挑んで欲しい

夜間の歩行になる男子は長袖、長ズボンの上に蛍光タスキを掛けることになっている。また、防寒着を準備する必要がある。男女とも検印所で身分証明書が必要になるので、万一見当たらない場合は早めに再発行の申請をすること。また、給水所では各自のカップが必要になるので忘れないようにしてもらいたい。その他必要事項を実施要項で必ず確認すること。

更に大切な事は体力の向上だ。体育の授業で持久走を行っていると思うが、疲れにくい正しいフォームを身につけるべきである。数十キロの距離になると僅かな差が、後半になって響いてくる。体育の先生方の指導に真剣に耳を傾けてもらいたい。自主的な練習もできるだけするとよいだろう。加えて疲れを翌日に持ち越さない事も大切だ。授業や部活動が終わったら早く帰宅し、家庭学習を終わらせて少しでも長く睡眠を取ること。また、睡眠の質を高める為に就寝前のストレッチ体操を勧める。

最後に心の準備である。大正13年に強行遠足を導入した江口校長は書いている。人は少し疲れるとすぐに楽な道を考えるか、途中で止めてしまう。こうした妥協に打ち勝つべきだと。未知のものに挑戦する時、阻害要因になるのは能力ではなく、妥協する心だ。人は自分が思う以上に強い。その事を知る貴重な機会だ。楽しみにしてもらいたい。

【野辺山救護検印所のしじみ汁は心も体も温めてくれる】

伝統行事で交流
今大会に北見北斗生が参加

平成4年から始まった、北海道北見北斗高校との交流は今年で21年目となる。

北見北斗高校は、一高と同じ行事名の強行遠足を昭和7年から実施している。「質実剛健」の気風を創るために山野を歩いていたことが現在の「強行遠足」へと発展していき、今では伝統行事になっている。

今年度で第81回目の強行遠足を迎える。他人との競争ではなく、「己に勝つ」ことを目的として実施される。

昨年は本校の生徒4名（現3年生）が北見北斗高校の強行遠足へ参加したが、今年は北見北斗高校の生徒4名が一高の強行遠足に参加し交流を深める。来校するのは平塚幸男校長先生を団長に、3年生の大西啓人君、石井梨紗さん、2年生の鈴木亮祐君、大山夏希さんを含め、計10名。歓迎会は大会前日、10月4日に行われる。北見北斗高校の生徒が一高に来た時には、歓迎し、「Be Gentleman」の精神を忘れず、紳士、淑女たる行動で、友情を深めて欲しい。

北見北斗高校の強行遠足は、本校強行遠足の1週間前、9月29日に行われる。

【第84回大会に北見北斗生が参加】

強行遠足に関する情報確認

強行遠足関わる連絡は学校のホームページに掲載いたします。

一高HP
http://www.first/kai.ed.jp/
※携帯電話からも確認できます。

「強行遠足新聞」は、平成2年から生徒会・新聞部より事前・事後、発行している。平成25年度の第1号は、上に掲載のもの。第2号は、お守りの作り方、中身に何を入れるか、材料はどこで手に入れるか、また、臼田のりんごの話やアップルパイの作り方など盛り沢山の内容。第3号は、最長記録保持者岩間孝吉さんからのメッセージや出発式で宣誓する生徒代表の決意文、一年生からの質問に答える記事など。第4号は、卒業生へのエールをこめた事後特集。

強行遠足前の思い…

自分との戦い

二年　河野　倫也

「伝統の一〇〇キロ復活」が甲府一高を飛び越えて山梨県、そして全国にも伝わっている。

こんなに大きく取り上げられる学校行事は全国でも稀だ。この強行遠足を約一ケ月に控えた今、私たちの心の中には二つの気持ちが入り混じっている。

一つ目は、「一〇〇キロ」を走りきりたい、自分の本当の限界に挑みたいという思いだ。私たち男子生徒の中で「小海」と「小諸」はどこか違うものである。一文字違うだけなのに、そこには言葉では言い表すことが出来ない何かがある。その「何か」を求めて、今回私たちは強行遠足に臨む。

二つ目は、完走できるかどうかの不安だ。一〇〇キロ、二四時間、時間制限、天候と、生徒のほとんどは、「昨年の七五キロでもきつかったのに、あと三〇キロなんてとても厳しい」と口をそろえるが実際はどうなのだろうか。

又、男子ばかりが注目される強行遠足だが、女子も高根から小海の約四三キロと、フルマラソンよりも長い距離に挑む。女子も男子同様に二つの思いを抱えていることだろう。

男女共に言えること、それは自らの限界に挑戦することである。一人ひとりにはそれぞれの限界がある。一〇〇キロに少し怯えている人も、そのような心持で取り組んでみてはどうだろう。

最後に、「一〇〇キロ復活」には、保護者、OB、OG、先生方、地域のボランティアの方々など、非常に多くの人々が私たちの一日を支えて下さる。私たちはすばらしい環境に置かれていることに、今一度感謝しなくてはならない。

気持ちが出来ている人、不安でいっぱいな人。どちらにしても、もうあまり時間はない。

今から、今日から限界に挑める体力作りを始めてみてはどうだろうか。

待ってろ「小諸」！

待ってろ「自分」！

自分に勝ち、一回り大きくなる

一年　金子　佳矢

強行遠足を迎えるにあたって、私は様々な先輩から強行遠足について話を聞きました。

「仲間と励ましあいながら、夜歩き続けたこと」「ゴールした時の達成感はかけがえのないものだということ」。経験した方々の話は、どれも説得力があり強く印象に残りました。そして、先輩方は最後に必ず「自分との闘いで自身が大きくなれる」ということを口にしていました。私は自分との闘いの場でもある、強行遠足でくじけたり、妥協したりしたくなる自分との闘いに打ち勝ち、大きくなりたいと思います。

一歩一歩踏みしめて、前へ

二年　保坂　玲

男子の最終到達地点が小諸となり、一〇五kmの全行程が復活しました。女子は既に昨年から四三kmに戻っています。日頃の運動を怠っている私は、男子を尊敬し応援すると同時に自分が完走できるか心配ばかりしています。昨年、卒業生である祖父に「何があっても座るな」と言われ、それだけを忠実に守って完走しました。検印所のパイプ椅子は視界に入れないように努めました。男子の過酷さが騒がれ、女子は楽だと錯覚してしまいそうですが、フルマラソンより長い道のりです。一歩一歩、踏みしめて前進したいです。

いよいよ、スタート！

- 男子は10月5日（土）14時、372名が、甲府一高を出発。天気、曇り。気温23℃。
- 女子は10月6日（日）7時、427名が、高根総合支所を出発。天気、晴れ。

八ヶ岳山麓の美しい
風景の中、歩く、歩く…

沿道の声援で、気力充電

ありがとう…
あなたの分までがんばります

暗闇に、持参のライトで道を
照らし、満天の星が心を
照らします
仲間は希望の光

女子先頭1年生ゴール

男子先頭2名同時ゴール

安全第一、
支援下さった方々に感謝

恒例、野辺山しじみ汁、
芯から温まります

しんどい時は、お互い様

ブラバンOG／OB応援

第87回強行遠足参加・到着状況集計表（本校生徒のみ）

男子	在籍	事前欠席	当日欠席	参加者数	参加率	到着者数	到達率
3年	123	2	1	120	97.56%	53	44.17%
2年	138	1	0	137	99.28%	91	66.42%
1年	119	3	1	115	96.64%	34	29.57%
全体	**380**	**6**	**2**	**372**	**97.89%**	**178**	**47.85%**

	A＝B＋C				B				C			
	前所出発数				途中中止				到着者数＝出発者数			
	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計
学校出発数	**115**	**137**	**120**	**372**								
韮崎	115	137	120	372	0	0	1	1	115	137	119	371
須玉	115	137	119	371	0	2	2	4	115	135	117	367
高根	115	135	117	367	1	2	1	4	114	133	116	363
大泉	114	133	116	363	1	1	5	7	113	132	111	356
野辺山	113	132	111	356	22	7	18	47	91	125	93	309
海ノ口	91	125	93	309	21	16	20	57	70	109	73	252
小海	70	109	73	252	30	11	13	54	40	98	60	198
佐久穂	40	98	60	198	0	2	2	4	40	96	58	194
中込	40	96	58	194	5	5	5	15	35	91	53	179
小諸	35	91	53	179	1	0	0	1	34	91	53	178

女子	在籍	事前欠席	当日欠席	参加者数	参加率	到着者数	到達率
3年	148	7	2	139	93.92%	125	89.93%
2年	135	1	2	132	97.78%	119	90.15%
1年	158	2	0	156	98.73%	122	78.21%
全体	**441**	**10**	**4**	**427**	**96.83%**	**366**	**85.71%**

	A＝B＋C				B				C			
	前所出発数				途中中止				到着者数＝出発者数			
	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計	1年	2年	3年	小計
高根出発者数	**156**	**132**	**139**	**427**								
大泉	156	132	139	427	2	2	0	4	154	130	139	423
野辺山	154	130	139	423	9	4	5	18	145	126	134	405
海ノ口	145	126	134	405	15	5	6	26	130	121	128	379
小海	130	121	128	379	8	2	3	13	122	119	125	366

結果

天候にも恵まれ、小諸までに復活した強行遠足は無事終了した。

男子は、参加者三七二名中小諸到着は一七八名、最終地点到達率は四七・八五%。二年生の六六・四二%が最高であった。一方、途中中止は、野辺山四七名、海ノ口五七名、小海五四名に集中している。

女子は、参加者四二七名中小海到着は三六六名、最終地点到達率は八五・七一%。こちらも二年生の九〇・一五%が最高であった。途中中止は、野辺山一八名、海ノ口二六名、海ノ口から小海の間で一三名であった。

強行遠足を終え…

強行遠足を終えて

一年　宮沢　真

強行遠足は自分にとって最もつらい出来事でした。百五キロメートル、この距離を歩くなかで僕はたくさんの事を思いながら一歩一歩踏み出しました。途中で何回もリタイアしようと考えましたが、友達と共に小諸を目指し歩き続けました。「何のために歩いているのか、いったい自分はどこにむかっているのか、やる意味は何なのか」など考えながら歩きました。自分なりにこの疑問の答えは小諸に到着してだすことができました。

僕は途中で足がとても痛くなり歩くのが嫌になりました。しかし一緒に歩いた友達や保護者、協力者の声援を受けてなんとか歩き続けることができました。野辺山の給水所ではしじみ汁をいただいて冷えた体をあたためることができ、さらに心まであたたまりました。

強行遠足は一人では絶対小諸に到着できなかったと思います。仲間や先輩方が何度も声をかけてくれて勇気をつけてくれたから完走できました。自分にとって最高の行事でした。

只管強行遠足

三年　河阪　幸花

私たち三学年にとって最後の強行遠足。周りの景色を見ながら、この景色を見るのも、もう最後なのだと思わずにはいられず、一年前や二年前も同じ景色を見たけれど、今年はその景色が今までと違って見えました。

以前、私は倫理の授業で道元について学習していた時、「只管打坐」と言う言葉に深く感銘を受けました。道元はひたすらに座禅に打ち込むという純粋な実践を求め、仏道に精進する中に悟りは開かれると言う修証一等を唱えました。私はその教えはまさに強行遠足も同じだと思います。足の痛さも日中の暑さも感じないほどにただひたすら歩き続けた先に自分のゴールが見えてくる、それが強行遠足の目的の一つだと思うからです。だから来年、私は卒業してしまいますが、今までの強行遠足を振り返り、後輩に何かアドバイスをするならば、「只管強行遠足」と言う言葉を残したいです。また私自身もこの経験を活かして、自分のゴール地点まで頑張ります。

北海道立北見北斗高校生の感想

●夜中に眠くなった時や足が痛くてペースが落ちた時に、励ましあった仲間と小諸のゴールまで一緒に行けたことをとても嬉しく思います。素晴らしい生徒達と、最高の先生方、スタッフの方々に支えられて甲府一高の延伸した一〇五・七㎞の強行遠足に参加できたことをとても誇りに思います。

（三年大西啓人君、二年鈴木亮祐君）

●強行遠足では、辛い時は励まし合い、生徒の皆さんだけでなく、保護者や地域の方々も応援してくださり、一高の皆さんと最後まで一緒にゴール出来たことがとても嬉しいです。温かく迎えて下さった甲府一高の皆さんに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

（三年石井梨紗さん、二年平賀鈴菜さん）

歩く
　歩く
　　歩く
まめをつぶし
　　足をひきずり
歩く
　歩く
　　歩く
眠くても
　　寒くても
　　痛くても
前を向き
　歩く
なぜ歩くのか
　　ゴールはどこなのか
ただひたすら
　歩く
　　歩く
　　歩く…

57年卒が協力した佐久穂救護検印所にて　2013.10.5~6

学校からの依頼により、昭和五七年卒の我々は、佐久穂救護検印所を担当することになった。今回が初めての参加である。五五名の同窓生が県内外から集結し、夜通し、生徒の安全確保と救護・諸対応に追われた。

救護検印所設置・遂行に関し、佐久穂町役場には、検印所の場所として八千穂支所庁舎の提供をいただいたばかりでなく、テーブル・椅子の他多数備品提供、六拠点の駐車場の確保、有線・広報誌でのお知らせ、また、当日は、三名の職員の方が宿直下さるなど、全面協力をいただいた。地元の方からは、ご理解ご支援の下、生徒やスタッフへ歓迎と労いの声かけや、検印所・拠点に果物・菓子類の差し入れを賜るなど、物心両面、生徒を歓迎していただいた。

当日、検印所担当者は、二一時に現地に集合し、設営準備。拠点担当者は、二三時に検印所に集合・打ち合わせをした後、早々に持ち場に就いた。

検印所では、まず、検印の手伝い。検印カードとハンコではなく、図書館カードによるバーコードチェック、パソコンでの管理・集計。ハイテクである。他に救護・給水対応の役も担った。

拠点は六箇所、スタッフジャンパーを羽織り、懐中電灯を片手に路上での生徒の誘導・安全確保に努めた。

夜が更け、暗闇と寒さの中、澄み切った美しい星空が生徒やスタッフ、そして強行遠足を見守っていた。しばらく静寂が続き、張り詰めた空気の中、かすかな足音が…。検印所のスタッフ全員の目が、一点に集中した。音の先には、小さな灯りが見えた。その光は、少しずつだが着実に大きくなって来る。上下に揺れながら。

「トップが来たぞ！」

赤いジャージ、二年生だ。ここまで、自分の力の限り、暗闇と孤独と疲労に耐え、走り続けて到着した。闘争心と克己心を秘めた精悍な表情の一方、給水している時に見せたほっとした笑顔はまだあどけなかった。スタッフ全員が彼の到着で歓喜し、一気に検印所が活気づいた。日付が変わり、〇時〇八分のことだった。その後、一九八名が佐久穂に到着し、一九四名が小諸を目指した。

我々の時代から三〇年経ち、様変わりしたことも多い。コンビニ・携帯電話利用ＯＫ。服装は、ジャージ。その下は、アスリート仕様のサポーターや靴。テーピングも本格的。しかし、変わらないのは、「ひたすら、歩く」こと。己の足で、己の力だけで。休憩時は、持参した筋肉消炎剤を塗ったり、栄養補助食品や栄養剤を飲んだり、生徒同士でストレッチをしたり、それぞれが工夫して、何とか力を補充していた。我々は、そんな彼らを、

「臼田まで、あと七㎞、そこまでは、がんばれ」

「ここで長居すると、あとがつらいぞ」

などと叱咤激励した。

マッサージを受ける間も、思うように歩けない悔しさから涙が止まらない生徒がいた。また、座った途端に睡魔に襲われ、制限時間ぎりぎりに慌ててよろけつつ出立した生徒もいた。

佐久穂検印所は、出発から八〇㎞、疲労と眠気のピーク・限界を感じつつ、残り二五㎞、制限時間と闘い、前進するか否かの瀬戸際にある。佐久穂を出立した一九四名の生徒の後ろ姿を声援と拍手で送り出し、「小諸必着」を祈願した。どの生徒も真剣で、雄々しかった。

佐久穂を出発できた生徒達を横目に見ながら、テント下でうずくまっていた四名がここでゴールした。その生徒達は、ぎりぎりまで悩んだ。どうしようもない体と、前進したい気持ちの狭間で、苦しみ、「悔しい」「情けない」「恥ずかしい」と口々に嘆いていた。自分の限界まで頑張り、自力で歩くのもままならない彼らの姿も、また、潔く凛々しかった。我々は、四名を労い、温かい拍手で帰りのバスへ見送った。

撤収時間になっても、熱い思いが収まらなかったが、午前一〇時過ぎ、佐久穂町を後にした。数時間後、無事、強行遠足完遂の報告を受け、協力者全員、安堵した。

応援するために参加したが、満身創痍の体でも前進するひたむきな生徒の姿から、

「前へ、前へ！」

と、我々が、エールをもらった気がした。

ありがとう 強行遠足
つなげよう 感謝の歩み

充実した日々

三年一組 担任
渡辺 明

私が甲府一高に赴任したのは昭和五四年四月、昭和五七年卒業の実行委員の皆さんが入学した年でした。校門から糸ヒバ越しに高々と聳える本館の威容、前庭や中庭の落ち着いた佇まいに昔日の思い出が重なりました。幸いにも立派な先生方と生徒に恵まれ、三〇年余りの教職生活の中で最も充実した三年間を過ごすことができました。定かではない記憶を頼りに当時を回想してみました。

学校創立百周年

在任期間中最大の行事は、創立百周年記念行事でした。県民会館で行われた記念式典では、中田大三神戸電鉄社長による「先輩に教えられるもの」と題する記念講演がありました。「自らの信念が貫けないのであれば、いつでも仕事を辞める覚悟である。そのとき路頭に迷わないよう『サムマネー』が必要である」といった趣旨でした。「これからの人生、気骨を持って生きなさい」とのメッセージをもらいました。

野球部二五年ぶりの優勝

赴任と同時に野球部長を任されました。その年の秋季関東大会県予選で甲府商業を破り二五年ぶりの優勝という幸運に恵まれました。翌年の春季関東大会にも出場する機会を得ました。東海大相模など強豪校を苦しめたことが懐かしく思い出されます。部員は少なく、中学生と評されるほど小柄な選手たちでした。どこにそんな力が秘められていたのでしょうか。目に見えない伝統の力が後押ししてくれたのかもしれません。

N君強行遠足で新記録を樹立

伝統行事といえば強行遠足です。「一切の妥協と怠慢を排し、精魂限り歩く」「体力に応じて歩けるだけ歩く」江口校長の言葉です。腰に草鞋を吊している者はいたが、今と変わらぬ学生服に白ズボン姿で、舗装も十分でない松本・千国街道をひたすら西へと歩いた頃を懐かしく思い出します。昨年、一一年ぶりに小諸コースが復活しました。伝統が脈々と受け継がれていくことを喜ばしく思います。

臼田のおばさんこと〈故〉依田トミ子さんで有名な臼田検印救護所に勤務する機会がありました。「三年間お世話になりました。後輩も宜しくお願いします」とお礼を述べて、三年生は検印所を後にします。清々しい光景でした。N君も「臼田のおにぎりが効いた」と述べています。岩村田で記録を意識したようですが、小諸で「新記録だぞ！」との声にも「感激はなかった」と述懐しています（佐久往還強行遠足二十周年記念誌より）。N君にとっては、記録を狙っていたのではなく、小諸を目指して、ひたすら歩き走り続けた結果にすぎなかったのでしょう。我がクラスの生徒を誇らしく思いました。

終わりに

東京オリンピックの頃を境に日本は高度経済成長の時代へと突入していきました。「物を大切にする」時代から「使い捨てにする」大量生産、大量消費の時代へと変化しました。また、高度情報化社会の到来は、様々な問題を内包しつつも進化し続けています。この激しい変化の中にあって、日本人の価値観は多様化しています。学校はこの多様化への対応を図るとともに個性化が求められています。自由で大らかな校風が好きでした。この校風を残しつつも、この変化の激しい時代を個性豊かに生き抜く力を育む一高であって欲しいと思います。過去の伝統を礎に新たな伝統を創造し、何時の時代にあっても、その時代の中で輝く甲府一高であることを願ってやみません。

希望は過去にしかない

三年二組 担任
山本 紘治

第一三四周年同窓会実行委員会から記念誌編集の連絡が届いたので、当時の記録を探していると、雑記帳の端に生徒とのやりとりが書かれているのが目についたのでそれを思い出し、現在の姿と重ねて書いてみたいと思います。

当時、私は三十代前半で、心身ともに健康に過ごしていた。当時の共通一次試験は五教科七科目千点満点という時代であった。本校からも二百人近い生徒が受験をした。

一次試験の次の日学校に行くと、三学年の職員室では先生方が各科目の解答を検討したり平均点について話し合ったりしていた。

そこへ一人の生徒Mさんが入ってくるなり、そこに居合わせた国語科のS先生、K先生と私の三人の先生方に聞いてほしいことがある、といって二日前に受験した国語の問題を広げて説明を始めたのだった。

そこの評論文についての解答が「間違い」ではないか、といってキーワードや接続詞を板書して説明を始めた。しばらくして、黒板に書き切れないために、解説がうまくできないということになり、大きな黒板のある教室に移動して三十分ほどの説明とやりとりが続いた。

彼女の弁舌は鮮やか、実に明快なものであった。彼女は難解な文章を論理一辺倒で解釈するのみでなく、文章は感情や情緒で認識してもよいではないか、として次のように説明していた。

出題文は

①文脈に論理の飛躍があり、論理性に瑕疵がある。

②文脈には倒置があり、結論が暗喩されている。

③筆者の主張は逆説に隠されている。

④この文にはキーワードが複数あり、それが必ずしもテーマに集約されていない。

⑤この箇所には情緒的な表現が見当たらない。

従って出題者は、この評論文に論理的な一貫性と逆説部分に隠れている結論のみを求めているのだ、ということだったと思う。

しばらくして彼女は自分の説明で納得できた時には、「共通一次試験のセンター」へこの説明を添えて質問状をだしたい、先生も名前を連ねてほしい、といった。国語の先生はしばらく考えて、「問題をよく検討して返事をする」と答えた。私は、「全く自信がないし、何も言えない、ごめんね」と返事をしたと書いてあった。

教員として若輩で力不足であったあの時代、Mさんの可能性に満ちた才知に触れて、感動とともになぜか胸が熱くなった。これまで一高教育に出会い、成長したMさんが渾身の力で問題に挑み、自らの存在を賭けた解答に何も答えられなかったのであった。Mさんのように主体的に学習に立ち向かう姿を見て、一高の教員でよかった、国語の問題にも応えられる教員になりたいという思いにかられたのであった。

今も、当時の出来事を思い出し忸怩たる思いを引きずっているし、一高生であった生徒の言葉が三十年後の今も鮮やかによみがえってきたのであった。私は今日も教壇に立って教えているが、小柄なMさんの姿を思い浮かべて、同じような質問がこないかわくわくして待っているのだ。私は過去の中に希望を見い出そうとしている。

今彼女に逢ったなら私は何というのだろうか。卒業写真の面影が昔のままだったら何と話すのだろうか。松任谷由実の歌が、今、頭の中にながれている。

昭和五四年その頃の風景随感

三年四組 担任
山本 秀彦

昭和五四年からの八年の間、甲府一高にお世話になることになりました。既にご承知の如く、一高は古い歴史・伝統に包まれ、多方面に亘り優れた実績を有するとともに、実社会の各方面にあって活躍する諸先輩を輩出している名門校でありましたので、気分は自ずと緊張の連続であったものでした。

その年の三月、初めて登校し校舎と対面しました。無言のうちに迫力をもって立ち、周囲を見下ろしながら移りゆく社会の中で、学ぶ高校生達を見つめている姿であって、まさに典型的な学び舎の佇まいでありました。

さらに、玄関を通って中に入って行ったのですが、薄暗い廊下と続く階段などの造作を見るにつけ、重々しく意味ありげな不思議な波のようなものの流れのなかで、柱や壁などにうっすらとついた黴色の埃、床板に染み込んだ油の匂いなどが混ざり合って醸す得体の知れない香が鼻孔に侵入してくるや、それがまさに一高の匂いなのであると自分勝手に信じこんでいたのでありました。

ずっと以前本校で学んだことがあった私は、若しかして何かの折に一高に奉職するようなことがあるだろうか？あるとするならば、教員としてどんなにか貴重な経験となることであろうか、などと思ったことがあるのですが、ここにおいては実際に起きている事実に、改めて気の引き締まる思いをしたのです。

そして思いがけなくも、その年の新入学生の学級担任をすることになった訳です。それが五四年入学の生徒達でした。従って、この年の入学生とは言わば同級生、諸行事の場面において同じ釜の飯をも食べる関係のつき合いが始まったということでありました。

教員として採用され先生と言う職業に就いたのですが、その業務内容は極めて多岐に亘るもので、担当し直面した事柄も様々な中、学級担任はその主なものでした。この時の最終学年は文系クラス担任でした。生徒諸氏が自分の目指す目標に向かってよく頑張ってくれたことが記憶に残っています。

一方、校庭の隅には三軒長屋と言う建物があって、そこの住人たちとは自然科学の分野をとおして将来を語ったものです。「iPS細胞の発見も夢ではない」？などと言う訳で少し遅かった？ようですが、夢を持ち続ければ成果は実るもの、実現が期待されます。

ところで、私は常々思いながら種々の時・場面で引用していることがあります。本校の生徒に話すこともあったのですが、それは、高校生等にとって、自分が超えるべき目標を持てることは幸せなことである、というような趣旨のことです。本校には先輩諸氏が残した偉大な遺産があります。其れは未来への遺産とも言うものであって、後に続く者達へ伝えられるなまの事例集の如きものであります。ことの大小を問わず、何かを為そうとするとき、具体的な事例との出合いは、希望の動機付けや意味付けにおいて有為な手懸りを与えてくれるものであり、挑戦することへの勇気を与えてくれるものであるなどと話したこともありました。

これからさき一高の歴史が連綿と続くなか、一高で学ぶ人たちにとっては、偉大な遺産に心し一高に学んだことの意義を思いながら、新たな遺産の創造者としての誇りを語り伝えていくことが大切な役割となることでありましょう、などと取り留めがないことを思ったところであります。

あれから三〇年

三年五組 担任
進藤 芳昭

三〇年ぶりに再会して

第一三四周年　甲府中学・甲府一高同窓会実行委員会を兼ねた、昭和五六年度卒業生の学年同窓会が開催されお招きをいただきました。

三〇年ぶりに再会し昔の面影を感じながら思い出話に花が咲きました。三〇年前の高校生時代のイメージしか残っていなかった私にとって、立派な社会人として成長している諸君の姿には目を見張る物がありました。

今私は定年退職後、国の地域スポーツ振興施策の柱である「総合型地域スポーツクラブ」創設の仕事に携わっています。県下全地域を訪問し、スポーツ関係者を中心に様々な人と地域スポーツの振興、誰もがスポーツを楽しめる環境づくりについて意見を交わしています。学校という社会の中で、高校生との対話が中心の人生であった私にとって、多様な価値観を持つ学校外の社会とのふれあいは、新たな発見が多くありました。

そんな経験から諸君と三〇年ぶりに再会し、立派な社会人として活躍している姿を見たとき、非常に頼もしさを感じました。

重要な任務である同窓会の運営についても、ゼロからの出発でありながらゴールを見つめ、道筋をしっかり立て、一歩一歩事業を進めていく運営能力と、課題解決能力の高さを感じました。

高校時代の諸君は

そんな諸君はどの様な高校生活を送っていたのでしょう。

昭和五五年度京都・奈良研修旅行の記録が本棚にありました。旅行に備え諸君がどんな取り組みをしていたのか読み直してみました。

記録によると旅行実施に向け研修旅行委員会を構成し、生徒自らの手で実行委員会を二五回開催し、研修旅行委員会ニュースを一六号発行しています。その中で強く印象づけられたのは、自分たちの旅行を、自分たちの手により創りあげると言う意識の高さでした。

研修旅行結団式での委員長の呼びかけが報告されています。

「今日まで一生懸命取り組んできた私たちです。立派な修学旅行が出来るはずです。班行動の計画も、HR研修も、レクリエーションも、何もかも準備が整いました。後は明日からの研修旅行を待つばかりです。私たちの手でここまで頑張ってきた研修旅行です。私たちの手で成功させようではありませんか！一高始まって以来と言われるような立派な研修旅行にしようではありませんか。」

これらの主体的体験が甲府一高の伝統であり成長の原動力となっているのでしょう。

リーダーとしての期待

前にも触れましたが、私は今「スポーツを核とした豊かな地域コミュニティの創造」に取り組んでいます。これはスポーツの上手下手に関係なく、誰もがスポーツに親しめる環境創りを目的としています。そしてその環境創りを住民自らの手で実現しようという、新たな地域社会創りです。

今の日本社会は「お任せ民主主義」と言われています。スポーツの世界でも、行政に準備してもらい、お膳立てして貰ってきたと言う歴史があります。その結果自分たちの社会を自分たちの手で良くしようという意識は弱く、個人は組織の一員として安住し、先頭に立とうとしない文化が形作られてきました。

その点、高校生活の中で主体的学習を積み重ねてきている諸君に、住民が主体的に地域創りに関わる、地域のリーダーとしての活躍を期待します。

甲府第一高等学校の思い出

三年七組 担任
高瀬 司郎

母校、甲府一高を卒業した頃は想像もしなかったが、有難くも母校の教員として一九七八年から八年間在職させてもらった。一九八一年度卒業生を送ったのは、もう三二年前になる。まさに「タイムフライズ」である。在職八年間で三年生を担当したのが四回あるので、いつの卒業生か記憶が混同してしまう。卒業アルバムを取り出してみて、記憶がよみがえる。創立百周年記念行事のあった年。チャールズ皇太子とダイアナ妃成婚の年だ。一九八五年の「プラザ合意」以前のまだ日本の勢いの良かった時代だ。

三年七組の懐かしい顔が見える。懐かしいと同時に、若き頃の力不足の担任であったことが、とても恥ずかしい。「私の母が一高で先生に教わりました」と先日、非常勤講師をしている学校の女生徒から言われました。気恥ずかしい。今ならば、教科以外にも、もっとましな指導ができただろうに、と思うと申し訳ない気持ちになる。忸怩たる思いである。卒業生の皆様お許しください。

あれから、私も色々なことがありました。卒業生の皆さんも、もう立派なお父さん、お母さん。「男子三日会わざれば刮目して見るべし」。三日どころか三二年も経てば、さぞかし立派になられたことと推察いたします。社会の中核として活躍されていることでしょう。

一高を取り巻く環境も変わりました。少しだけ持論を述べたいと思います。

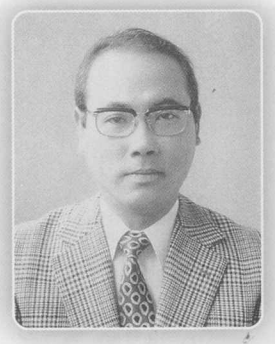
▼「天地の化育を賛くべし」・・・一高の校歌。いくつもの高校で勤務いたしました。それぞれに持ち味のあるすばらしい校歌でした。でも、一高の校歌は別格の感じがします。

四校の総合選抜となって以来「甲府北高」的な存在になり、学区の制限も撤廃されましたが、県下一番のエリート高校でなくなってから随分久しくなりました。でもそれは時代の趨勢、仕方がないことだと思います。市場原理のもてはやされる昨今ですが、高校再編で甲府唯一のエリート高校に戻ることはもう難しいでしょう。中高一貫が言われていますが、それをもって一時代前に戻れるとは思えません。

私は「同じように生徒が振り分けられているのに、どうして一高は魅力的なんだろう」と思われるように努力すべきかと思います。それは伝統というプラスアルファを持つ一高の総合力でしょう（進学実績は無論のことですが、それを含んで）。そのとき、一高校歌は平凡に普通に歌われてもよし、あるいはまた、我が校歌のDNAに触発される魂が幾つか現れても不思議はないでしょう。

▼強行遠足。母校二度目の勤務（二〇〇一～二〇〇四）。不幸なことに行事中に死亡事故がありました。その時は緊急避難的ということもありましたが、しばらく距離を短くして（野辺山まで）実施することになりました。私は、強行遠足を取り巻く環境が江口俊博先生の頃の牧歌的な交通事情ではなく、昨今の交通量を思えば短くてよいと思いました。それでよかったと思います。距離は短くても文字どおり「シンボル」として残せばよいと思いました。一高は二〇一三年の昨年、元の百キロに戻したようですが、生徒の安全確保は無論のこと、職員や父兄の負担を思うと少し心配になりました。

がっしりしたコンクリート造りの、あの油くさい校舎ではなくなり、懐かしい講堂もいまやありませんが、一高は一高です。「日に新た、また日に新た」。母校に幸あれ。



回想

三年八組 担任
駒井 和彦

十一年ぶりに復活した強行遠足、テレビの放映で、懐かしく拝見いたしました。定年退職して、既に二十年近くになりますが、甲府一高の強行遠足は、常に脳裏から離れることがありません。生徒としても実際に参加した行事ですから、不本意な事故のため、一時短縮せざるを得なかったことは、まことに残念でたまりませんでした。ゆえに復活を、心から嬉しく存じております。

教師としての現役時代、甲府一高には十年間勤務いたしましたが、強行遠足につきましては、そのうちの一年は韮崎検印所、あとの九年は松原湖検印所勤務でした。松原湖検印所の泉屋酒店（小池さん）は、今でもご健在でしょうか。このところご無沙汰しておりますが、もし従前どおりでしたら、よろしくお伝えください。ともあれ、この小諸コースが、今後も永続してゆくことを、心から念願して止みません。

思い返せば、私自身が生徒として在学したころは、松本・大町コースでした。出発して間もない登美の坂、やがて延々と続く甲州街道、どうやら県境も越えて辿る信州路、やっと諏訪に行き着いて、さらに松本・大町方面を目指す。このコースが、その後、交通事情の関係で小諸コースに変換されたわけですが、コースの違いはともあれ、甲府一高にまつわる思い出は、生徒としても、教師としても、この強行遠足にほかなりません。みなさんも、好悪に関わらず、この行事の思い出を、ぜひとも胸に秘めておいてほしいと存じます。

ところで、甲府中学・甲府一高も、本年度は百三十四周年を迎えることになるのですね。たまたま自宅の書庫に、山梨県立甲府中学校・甲府第一高等学校の『写真集・百年のあゆみ』、『百年誌』の二冊がありましたので、手もとに置いて、その百年余のいきさつをひもときたく、ページを追ってみることにいたしております。

昭和二十二年、学生改革により、旧制の中学校・女学校は募集停止となり、義務教育として、男女共学の新制の中学校が始まることになりました。いわゆる六・三制です。

この年度、小学校を卒業することになっていた私どもは、進学希望者を対象とした受験のための補習課外講座もなくなり、全員、新制中学校へ進学することになりました。私は、学区制に従って、甲府市立朝日小学校から甲府市立北中学校へ進学しました。かつての六・三部隊兵舎跡が、とりあえずの校舎でした。そこで三年間、遊び学んだあと、甲府一高へ進学することになります。

たいして勉学には力を入れなかった私ですが、昭和二十五年四月一日、何とかやっと甲府一高に入学することができました。そこでの学校生活は厳しいもので、毎月「月例テスト」なるものが行なわれ、毎回毎回成績優秀者が発表・掲示されました。ともかく、勉強のできる仲間が多いことに、驚きあきれたものでした。勉学はともあれ、私は交友（交遊）関係に力を入れていたように思います。昭和二十八年三月一日が卒業証書授与式だったので、この学友仲間で、「二八会」なる組織を構成し、今もって、時折集会いたしておりました。しかし、もう年が年ですから、この会も自然消滅かもしれません。

『百年誌』によりますと、昭和二十五年五月二十日、篠原寛二第十五代校長が着任し、私ども一年生は、校門で出迎えました。この校長先生のお嬢さんが、「森川」さんと称し、私宅の近くにお住いで、おつき合い申し上げておりました。あれやこれや、懐かしい限りです。

末筆になりましたが、昭和五十七年卒業生のご健勝を、心から念じあげます。

あの頃の一高の思い出―思いつくままに

三年九組 担任
手塚 悦子

今から四十年近く前、私は歴史と伝統が色濃く残る旧校舎の時代に、英語科教師の一人として一高に赴任しました。はじめて一高の門をくぐった日、校長室にかかげられている石橋湛山先生の書を拝見し感動と緊張感で胸がいっぱいになった自分を今でもはっきりと覚えています。折りしも、創立百周年の記念行事を一年後に控え、職員全体でその準備にとりかかっているところでした。

一高の生活で私が最初に驚いたのは、校内が土足のままであったことです。初日はためらいがちに足を踏み入れていましたが、慣れてくると、これも古い校舎にはマッチしていると納得したものでした。冬の寒い日には、ロングブーツのまま教壇に立つことさえありました。おそらく何十年も以前から先輩たちもこうしていたのでしょう。これは他校にはない一高の自由な気風、おおらかな伝統の一つであったかと思われます。

一高には、おおらかさだけではなく、ショックを受ける程のきびしい行事もありました。一年生が入学当初に受けるうす暗い講堂内での応援練習の試練です。校歌、応援歌の徹底した暗誦、大声での返事、敏速な行動等がくり返し要求され、新入生にはきついものでありました。担任としてその場にいた私には耐えられない気持でした。この是非は別として、その後のさまざまな集会での全校生の立派な姿に、私はいつも感動しました。集会時の担当の先生による見事な指導もさることながら、応援練習の成果が実っているものと、今は受けとめています。整列の素早さ、校歌斉唱時の胸を張って声高らかに歌う生徒たちの姿こそ、母校への誇りの証として映り、いつも胸を熱くしたのです。

学業の面では、西高、南高、一高の三校（のちに東高を加えた四校）による総合選抜の時代であり、私たち教師側も、他校には決して負けたくないという意識をもってきびしく指導にあたりました。外部模試の度毎に他校との成績をくらべて、喜んだり安堵したりしながら生徒と共に頑張ったのも、心に残る思い出です。

さて、四季を通じて思い出は尽きません。

春には校舎の前庭には、生徒たちの手によって花壇がつくられ、マリーゴールドやパンジーが咲き、憩いの場となっていました。昼食のパンを食べている生徒たちの横に黒のマジックで眼鏡をかけられ、すっかり一高生の仲間になって並んでいる茶色の柴犬がいました。そんなのどかでなごやかな光景も浮かんできます。

真夏の暑さはきびしく、校舎の西端にある教室での授業は、暑がりやの私には辛く、耐えるのがやっとくらいで、かなり参りました。三階は特にひどく、生徒たちも大変だったでしょう。

秋です。最大の年中行事である強行遠足です。私は九年間、本部である野辺山で勤務しました。スタート当日の朝から終了日の夕刻まで、保護者の方々と共に、暮れかかり、寒くなった広場で設営をすませ、冷え込んだ高原の本部に次々とやってくる生徒たちを温かいしじみ汁で迎えました。一杯飲んで、又黙々と歩き始める生徒たちの後姿を見送りながら、何十回も続いているこの行事のもつ力に深い感動を受けたのです。

長い時間をかけての学校の緻密な実施計画、生徒の自覚ある行動、保護者の協力等が集約され完遂されるのです。甲府一高という強い絆で結ばれた生徒、保護者、職員、さらに地域社会の協力があってこそ成り立つ行事です。心と身体で自己の限界に挑戦しなければならないこの行事での体験が、生徒の皆さんの未来に大きな力となってくれることに違いありません。

「歴史と伝統」この言葉は甲府一高を語るのに欠くことは出来ません。この言葉が呼び起こしてくれるのは、静かに湧き上がってくる感動です。この心を失うことのないよう、甲府一高が、さらに大きく飛躍してくれることを願っています。

3学年の先生方

なつかしき声

亡き恩師の先生方の声と校歌・応援歌を聴くことができます。塩野・保坂両先生の声は小野泰史君・八木孝仁君・藤巻慎司君の三人が録音してくれました。また、久保寺先生の声は、卒業記念に生徒会（在校生）から配布されたEPレコードが出典です。

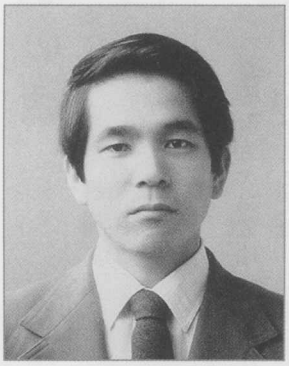
■QRコードの使いかた

スマートフォン、タブレット端末をお持ちの方は、この記念誌に記載したQRコードを読み取ることにより、校歌・応援歌、恩師三名の言葉を聴くことができます。インターネットに接続するので、機器使用の際は、通信環境によって、パケット料金（通信料）が発生する場合があります。

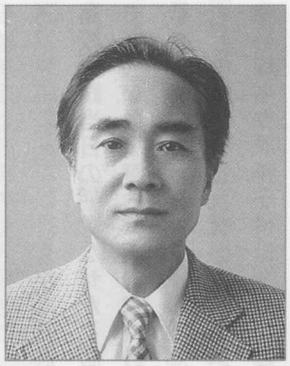
なお、実行委員会ホームページ内にあるアドレスhttp://kfhs57.web.fc2.com/onshi.htmlに直接アクセスすることによっても、聴くことが可能です。

恩師3名の言葉

校歌・応援歌のQRコードは三ページに掲載してあります。



3年6組担任
保坂 憲治 先生



1・2年次 学年主任
塩野 雅貴 先生

3年次 学年主任
久保寺 貫一郎 先生

特集 みんなで綴る 私達の一高

甲府中学・一高で過ごした時間はわずか数年。一三四年の母校の歴史から見れば、私達が体験できるのはその一断面に過ぎないのかもしれない。

今回の特集は、多くの同級生からの寄稿をもとに一三四周年同窓会当番幹事である昭和五七年卒の私達の時代の一高を浮き彫りにした。甲府中学・一高の一断面として、同窓生の皆様には自分の学生生活と比べて楽しんでいただければ幸いである。

昭和五四年四月、私達は入学式に臨んでいた。総合選抜制度が四校選抜になって三年目、伝統ある山梨県立甲府第一高等学校の門をくぐったことを素直に喜んでいる者もいれば、複雑な思いを抱いている者もいた。

そんな私達が過ごした三年間、一高は創立百周年を迎え、講堂が取り壊されて百周年記念館が建てられ、記念式典などの行事も行われた。他の高校ではなく、甲府一高で学ぶということはどういう意味を持っていたのか。そこでの学生生活はどんなふうだったのか。今だからこそあのころ経験したことの意味が理解できることもあるだろう。

これは総合選抜で入学した私達が一高生になっていった物語である。

入学の頃

合格した！ 学校はどこ？

当時、公立高校受験のチャンスは一回だけ。倍率は高くなかったが、それなりに緊張していたようだ。

■正　夢

二組　櫻田みち子

私達の頃の受験制度は四校の総合選抜で、甲府一高、南高、西高、東高のどこに行くかは選択出来ませんでした。高校入試当日の朝、なぜかご飯茶碗が真二つに割れて緊張が最高潮に。案の定、数学は計算間違い等々散々の結果でした。

選抜に落ちてしまうかもしれないと落ち込んでいた時に一高の赤い蝶ネクタイを付けた制服姿の私の姿が夢に出て来ました。入試発表を見てびっくり。夢は正夢となり甲府一高の合格者名簿に私の名前がありました。

一高での高校生活は本当に楽しかったです。憧れの野球部マネージャーになり秋の関東大会にも連れ

て行ってもらいました。

社会人になってからも一高出身という事で年上の方々から多々面倒をみて頂いています。また山梨県特有の無尽では理科系クラスの仲間で今でも定期的に集まり高校時代の思い出話に花を咲かせています。これからも甲府一高出身の皆様宜しくお願いします。

ちょっと特殊な経験をしたという話も。

■一高入学秘話

八組　長田(清水)文子

入試の時、私には願書ともう一枚の書類がありました。総合選抜制のため双子受験者にはこんな選択があったのです。合格に際し①同じ高校にする②あえて別々の高校にする③抽選に任せる……の三択。

考えましたよ、一応姉として権限があったので。小さい頃からいつも一緒。何かにつけ比べられる生活に少し辟易としていたし、義務教育も終わったことだから、それぞれの個性を生かして離れてみるのもいいかな、といろいろ考えを巡らせていると、三者懇談に列席していた母がすかさず「学校に出かけたりするのが別ですと面倒なので①でお願いします」と言い切り、私の小さな野望はわずか数秒で断たれました。

そして二人で一高へ入学。クラスは同じにはならなかったのですが、登下校も一緒、部活動も一緒、強行遠足のゴールも一緒。好きになった人は、さすがに別でしたが(笑)。やはり二人でいると心強かったのを今でも覚えています。

中学の卒業式の翌日が合格発表だった。合格したかどうかの次に、どこの学校に行くのかが大きな関心事であったことは、珍しい経験だったと言えよう。

「お前達は真の一高生ではない！」

入学式を終えた私達には様々な行事が待っていた。当時の県民会館で行われた新入生歓迎会では多くの部活動が紹介された。新入生の宿泊研修は箱根から何故だか愛宕山少年自然の家に変更され、少々がっかりしたものだ。

中でも応援練習は強烈な印象を残した三日間だった。前日には講堂に集められて応援練習の練習までがあった。

いきなり「お前達はまだ真の一高生ではない」と始まった、多分に蛮カラの気風を残したこのような行事が残っていることは当時としても珍しかった。賛否は分かれるところだろうが、校歌や応援歌がしっかりたたき込まれたことは確かで、その後集会や野球応援などの機会に歌われる校歌や応援歌は見事なものだった。同窓会で歌われるときにも往時の力強い歌声が蘇る。

■応援練習

二組　中山辰人

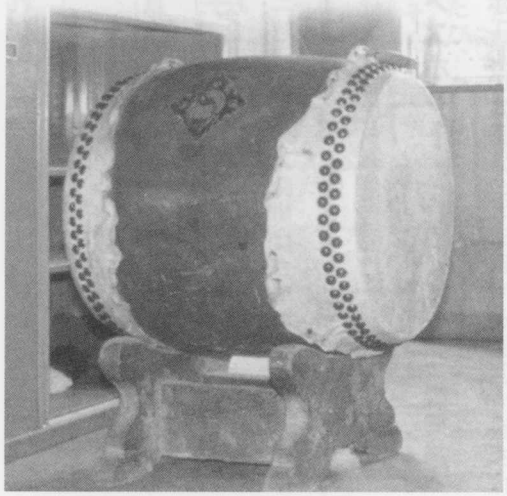
入学して間もなく応援練習に参加しました。応援団入場の言葉と同時に体育館の扉が開き、応援団のテーマ曲（サンブル・エ・ミューズ連隊行進曲）に合わせ応援団が入場して来ました。

何と入場途中で首根っ子を掴まれ、

「前へ出ろ！」

「はぁ？」って思う時間も無く舞台上で正座、両手は頭の上で手拍子、それを延々と一時間位はやっていたかな？　座らされて間もなく同じハンド部の八田が隣に座り同じく手拍子。この時はハンド部が何故か多く、マメ（苗字遠藤）も上っていた様な気がします。

数日間に亘り応援練習が行われ、校歌は勿論ですが応援歌も全て覚え、卒業後三〇年を過ぎましたが今でも脳裏に焼き付き、何時でも口ずさむ事が出来ます。応援歌は今でも卒業生には人生の応援歌です。挫折しそうな大変な事があっても応援歌を思い出すと元気が出ますよね。これからも心に桜花の旗を振り頑張ろう。



時間は前後するが、翌年には全く逆の立場で応援練習関連行事に参加することになった人もいて、こんな体験を寄せてくれた。

■生徒会歌

七組　前田(保坂)和彦

旧講堂だったか体育館だったか記憶が定かではないが、新入生の生徒会説明会みたいなものがあった時の事。

その中で校歌や生徒会歌の練習の時間があった。人数が足りてないので、指導のお役目で新入生のそばに立つことに……

一人の女子が分からないところを聞きたそうな雰囲気でちらちらと私の方に視線を向けてくる。突拍子もなく生徒会長になった私だったので、生徒会歌なんて分かって無い！　視線を合わせないように聞いてくるなよオーラを出しまくる。

結局逃げ切れたのか、聞かれてなんとかやり過ごしたのか記憶に無いけど、あの緊迫感は今も憶えている。

当時とても大人に見えた先輩たちも、今から考えれば一七、一八の若者だった。いろいろな思いを胸に私達を迎えてくれていたのだろう。

一高生の学校生活は

一高ならではのあれこれ

当時、一高の門をくぐると、美しい花々が目を引いた。本館前や中庭にも大小たくさんの花壇が作られていた。大木七郎先生、黒部信義先生と園芸部の先輩たちが丹精こめて世話をしてくれたものだった。それを含めて一高には一高独特の雰囲気があった。

■学び舎

八組　雨宮(島田)ミキ

……目を閉じる……本館、好きだったなあ。二年八組の教室は二階、階段上がりすぐ右手。狭くて、暗くて、隙間風が吹き、快適ではなかったけど、建具・照明・床・壁など趣があって好きだった。それから、本館屋上は女人禁制、男子の聖域だった所も、バンカラぽくて結構好きだった。

……次に、思い出すのは……花壇、四季折々の花が咲いていた。土曜日、中庭、花を眺めながらのランチタイムが好きだったなあ。お気楽な我々に関せず、園芸部の方が、タオルを首にかけ、リヤカーや一輪車をひき、汗と土まみれになりながら黙々と手入れしていて、感心した。

一高時代、ボ～ッと過ごした私でさえも、学び舎は、心に溶け込んでいた。あの環境のおかげで、私は、その後、建築・花・美術等に心が向いていったのかもしれない。

……私、一高、好きだったんだなあ。

一高には高校としては珍しく食堂があった。名前は日新ホール。なぜだか利用者はほとんど男子で女子の姿はあまり見かけなかった。昼休み前から開いていて、二時間目の休み時間に三階の教室から駆け下りてラーメンを食べ、また三階まで駆け上ってきた猛者もいた。

■グルメスポット

一組　森屋治人

日新ホールの定番メニュー
ラーメン・天丼・カツ丼（ハムカツ丼）
お気に入りはチキンライス
具なし・色なし・味なしの……
お皿がキャンパス
ウスターソースで絵を描く
水で薄めたサラサラソース
薄い肌色のライスが
魔法の絵の具で紫色に
仕上げに塩で、微調整
「う～ん、うまい　今日は抜群」
思い返すと口が緩む
キンコン　カンコーン
「ヤベ～　チャイムだ　急げ」
……
なんだ　夢か

これも一高独特のことだったが、本館一階の第一職員室の他に各学年の職員室があり、さらに各教科の準備室もあって、どの先生がどの部屋にいるのかを覚えるのは結構大変だった。いつの時代もそうだろうが、職員室に入るのには若干の緊張感が伴うものだ。

■出席簿

五組　三井(平賀)裕美

そのことを、なぜ私がしていたのか、他の人と当番制でやっていたことなのか、今ではまったく思い出せないのであるが、毎朝、職員室の壁に掛けてあった出席簿を取りに行ってクラスの教壇の上に置くそれだけの日課。先生が出席をとるときに使う縦長の黒い表紙のちょっといかめしい「出席簿」。

当時電車通学だった私はクラスの中でも一番の遠距離通学だった。乗る電車によっては妙に早く学校に到着したり遅刻ギリギリだったりの通学だったはずなのだが、私の高校時代の記憶は、朝のピンと張り詰めた職員室を訪ねることから始まっている。

決して楽しみにしている日課ではなかったはずだけど、嫌々していた記憶もないし、どのクラスにもその当番はいたのだろうに、誰にもそこでは会った記憶が無いのも不思議なこと。別に悪いことをしているわけでもないのに、妙にドキドキして朝の職員室のドアを開けている自分の姿が思い出されるのである。

中庭花壇

旧本館１階

日新ホール

授業での一こま

授業は月曜日から土曜日まで、月金は六校時、土曜日は四校時までだった。そのほかに一年生の時は希望者だが週三日の早朝課外、三年生は放課後課外、長い休みの時は外部講師による講習会なども行われていた。しっかりと進学校の体制だったのだが、寄稿からはおおらかな授業風景が伝わってくる。

■「長嶋茂雄君」

二組　飯野信一

昭和五五年の初夏、二年二組、男子クラスのある日のこと。誰かが教壇の座席表の空席のところに「長嶋茂雄」といたずらで書いた。

その日、架空の長嶋茂雄君は

「じゃあ次の問題を長嶋！　長嶋茂雄やってみろ」

といった具合に複数の先生方から何回か指された。そのたび、クラス内は大爆笑。

あの頃そんな洒落のきいた先生方がたくさんいて、楽しかったと思う今日この頃。

ちなみに長嶋茂雄君は、翌日、担任によって退学となった。

■チリモリ先生

九組　山本雄一

地理の森先生（チリモリ先生と生徒は尊敬していた）には、最後の授業の時、一年間の総仕上げで、自分の旅した各国各地の様子をスライドで見せていただいた。

見慣れない諸外国の様子を興味深く見ていると、何の予兆もなく、突然、旅行中の笑顔の女性の姿が現れた。慌ててその写真を隠そうとしながら、「これは私のワイフです」の一言に、教室内は温かい笑いに包まれた。最愛の奥様を自慢するチリモリ先生のいつもの手だったようだ。

伝わっていくもの？

■幻の机

六組　鈴木天洋

あの授業は、確か二年生の時、英語だったと思う。先生が、前から座ってる順番に答を求めていった。太田、矢島、次は俺だと思ったその時、米倉へ飛んでしまった。何故……？　俺は待っていたのに……（笑）。野球の打順じゃ、ありえない話だ。

それはそうと、不思議なことに、何と、俺が三年生の時に使っていた机が、三〇年後の今も学校で使われてるらしい。一高に入学した息子の友達から連絡があり、証拠の写真がメールで送られてきた。

卒業前に落書きした愛着のある机だ。何とかこのまま永遠に使って欲しい。

考えてみれば、当時の先生方の多くは今の私達よりも若かったのだろうが、はるか先を歩いている存在だった。今のように友達感覚などというものはなく、先生は先生で、生徒は生徒で、そこには厳然とした線が引かれていた。

しかし、先生に対する親しみの感情はあって、多くの先生にあだ名が付いていた。「つちまつ」先生（土屋松男先生）のように名前を短縮したもの、「タンクさん」（古屋幸雄先生）のようにお姿からきたものなど様々な由来のものがあった。先輩から代々伝わってきた名前も多く、先生方も自分のあだ名をご存じのようで、自ら使うこともあったようだ。そのあたりも一高の伝統と言えるだろうか。

■大浅小浅

五組　増村双葉

社会日本史の、大柄な浅川先生が「大浅」、小柄で眼鏡の浅川先生が「小浅」。幼稚園から梨大附属の温室育ちだった私には、一高は初めて触れた「社会」のようなもの。先生にあだ名をつけるという発想もなく、初めて聞いたときは「なるほど」と思い、同時に「そんなこと言っちゃうんだ」と驚きも。

ずっと後になって、清水次郎長の子分に「大政」と「小政」がいると知って、「もしかしてこれを踏まえてた？」。あだ名も文化的？だったんですね。

部活動と仲間達

活躍の裏側で

高校生活を振り返って、部活動はとても大きなものを残してくれたことに気づく。厳しい練習に耐える力、指導者や仲間達との絆、喜びも挫折もふざけあったことも対立したことも、すべてが自分の礎になっている。まずは優勝した部から。

■記憶に残る一枚

四組　村松　訓

甲府一高男子硬式庭球部。三年時の高校総体、試合後の写真です。結果は、笑顔が物語る通り、もちろん優勝でした。三年間の部活動の頂点にいた瞬間でしたが、みんな写真の存在さえ、絶対に覚えていないと思っていました。それぞれが自分の目標に向かって独自に歩いていた印象の強かった庭球部（本人たちはそう感じてはいませんでしたが）。次のイ

ンターハイも勝てるはずなのにすっぱりと受験を選び、試合は欠場していました。

しかし、予想外にこの写真のことをみんな覚えていたのです。しかも、その日の決勝の内容まで!? 必ず勝つはずの最初のダブルスがリードされてしまったこと。気の弱いシングルス二人に余計なプレッシャーを与えて試合前からビビらせてしまったチームメイトがいたこと。ビビりくんは、気合いを入れて試合に備えるのではなく、気合いを入れてダブルスの応援に回ったこと? そんな後の一枚は心に刻まれていたのです。

野球部も大活躍。緑ケ丘の野球場で県予選が行われ、応援も応援練習の成果を遺憾なく発揮した。野球部キャプテン、続いてエースの想い出。

■カチンコチンのグラウンド 七組 矢島清文

昭和五四年春、私達九名は一高野球部の練習に初参加、当時硬式を握るのが初めての人達ばかり。これからどんな練習になるのか不安で一杯の初日。三年生三名、二年生は八名、三年生はとても大人に感じた。

一年生は昼休みにレーキを使ったグラウンド整備が待っている。昼休みには食事をする時間がない。三時限目の休み時間に校舎の階段を駆け上がり屋上で弁当をかっこんだ。

夏休みの練習はえらいきつかったなあ。休みなんて全くない、水も自由に飲めない、それが当たり前だと思っていた。

そして秋の大会、私達も新チームの一員として全員ベンチ入り（部員総勢一六名）。一戦必勝で二五年ぶりに山梨大会優勝（三回目）、なんと関東大会へ（宇都宮）。完全アウェー状態の中、延長一〇回サヨナラ負けの宇都宮学園戦。今だったらセンバツ21世紀枠候補か!?

今でも蘇るあの打席、あの緊張感、甲子園行きたかったね。（チーム平均身長一六五cm！）

■充実した野球部の思い出 六組 鈴木天洋

第一希望の一高合格が決まり、とても嬉しかった。早速野球部に入部し入学前から練習に参加したが、夏の練習はとてもきつかった。

新チームになった秋の県大会で、なんと二五年ぶりの優勝！ 関東大会への切符をつかんだが、宇都宮学園戦では、涙の延長サヨナラ負け。翌春の関東大会では、初戦走者一掃打で貢献も出来、二回戦は、全校応援の前で東海大相模と善戦。

甲子園を目指し白球を追い続け、輝いた青春の三年間だった。今思えば、井上先生、渡辺先生、故斉木コーチには、ほぼ一年中休みもなくご指導頂き本当に感謝している。

キャプテン矢島を中心に、太田、米倉、飯野、窪田、田中、渡辺、斉藤と、とてもまとまったチームだった。伝統ある甲府一高野球部ＯＢである事をとても誇りに思う。唯一願いが叶うなら、今一度鍛え直して最後の夏に臨みたい。

厳しさと挫折と

もちろんつらくほろ苦い経験もあった。それも今思えば高校卒業後の人生の糧になっているのだろう。

■インターハイ予選

四組　内藤智司

サッカーインターハイ予選で、選手権準優勝など、全盛期の韮崎高校と対戦。前半終わって八点差。それでも顧問の鈴木先生はハーフタイムに「いい戦いをやっている」と褒めてくれた。結局一六―〇というラグビーのようなスコアー。得点とキッフオフのホイッスルが鳴りっぱなしのゲーム。翌日学校に行くのがつらかったのを覚えている。息子も今年から一高サッカー部、生涯つき合いが続く仲間ができることを期待している。

■夏合宿

四組　平山(松野)美香子

私にとって強行遠足よりもキツかったのは、学校で行われたバドミントン部の夏合宿だった。

OB、OGが訪れ、厳しい目が光る中、朝から晩までの練習メニューは私にとって途轍もなくハードで、かけ声に合わせて行われるサークルジャンプや筋トレは果てしなく続くように思えた。自分から音を上げるのは悔しかったから「倒れろ、倒れろ」と念じながら続けていた。「神様、何でもするのでお願いします!」と。でも人間なかなか倒れないのだなあとその時思った。とにかく辛くて、どうにもならないのに、仲間と二人更衣室に隠れたりもした。そんなだから合宿の終わりにOBの先輩に「お前らよくやった」と言われた時、すべての思いがあふれ出して号泣した。今から考えてもあれほどキツい経験はなく、あの合宿を思えば大抵のことは乗り越えられる気がする。

仲間がいたからこそ

厳しくても、やはり部活は楽しかった。そこには仲間がいた。

■三人

七組　三井(丸山)都奈美

入学の時は六、七人いたと思うけど、卒業アルバムには三人だけ。

たぶんこの三人の中にも辞めたいと思った時もあったと思うけど、三人で励まし合って最後まで続けた。決して強くなかったし勝てなかったけど……。

高校の想い出って言うと、ハンドボール部のことが真っ先に浮かんでくる。三〇年以上たつけれど、全く変わらない三人でした。

■「楽泳会」

三組　小泉一昌

その当時、水泳部はあまり強いわけでもなく、でもそれなりに練習して大会にも参加していました。

泳ぐことが好きだった部員たちのコンセプトは楽しくなければ水泳ではないというわけで、ついた名前が「楽泳会」。とにかく楽しく水泳していました。

部員も少なかったので、いろんな種目に出てみたり(出させられたり)しました。楽しい三年間の部活動でした。

先生やコーチ、先輩、後輩、仲間たち、そのほかにもお世話になった人は数知れない。当時はわからなかったことも感謝とともに思い出す。

■合宿の食事

六組　藤原辰巳

ここは、一・二年の軟式庭球部夏合宿時、毎日食事を作っていただいた鳳華楼。

合宿中の楽しみといえば、唯一食事くらいである。

ただ、炎天下での練習後の昼食は、なかなか喉を通らず残してしまうことが多かった。

その頃は、残すことに対してあまり気にしていなかったが、卒業してからはずっと申しわけない気持ちが頭の片隅にあった。

「忙しい中、一生懸命作っていただいてありがとうございました」

そんな気持ちをこめて今度、家族で食事に行こうと思っている。

部活にかこつけて別の方面に励んでいたという「今だから」言える告白も寄せられているが……。

■空手部の関東大会の思い出稲毛編　九組　石橋弘基

三年生の総体で我が空手部は団体型の部で三位入賞、千葉県稲毛で開かれた関東大会に、山紘先生以下、高橋賢、星野浩一、石橋で出場しました。

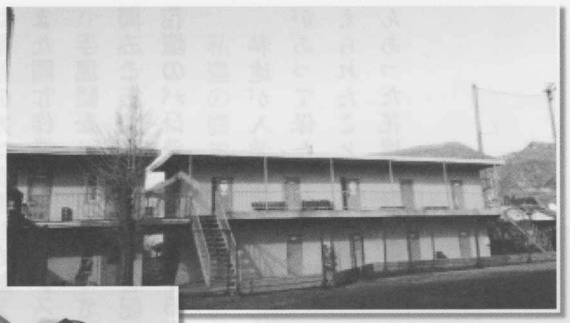
初日の稲毛駅では練習場へ行くバスが分からず、先生が何人もの運転手にペコペコしながら尋ねた末、「おまえらも聞け！」と逆切れする始末で、波乱の幕開けとなりました。

その夜、旅館での夕食が済むと先生は「用事がある」と、何処かに外出（酒を飲みに行ったか？）。残された我ら三人も意気揚々と旅館を出発。目指すは映画館、鑑賞予定はズバリ「日活ポ？？」（題名は忘れました。当然一八歳未満は鑑賞不可）。

映画館の受付のおばさんをやり過ごし、無事潜入完了。衝撃的な映像が今も瞼の裏に焼き付いております。一七歳の少年には夢のような約二時間。旅館に戻ってからも暫く寝付けませんでした……。

翌日の大会は三人とも寝不足、体調不良は明らか。前蹴りもキレがありません。当然、予選敗退。されど、三人には衝撃的で充実した二日間でした。

二〇数年後、我が娘が大学進学し、アパートの最寄り駅が稲毛。窓から空を見上げた時に、脳裏にふとあの映像が……。「父さん、稲毛ってなんだか好きなんだ。理由は言えないけど……。」（完）



多彩な文化部の活動

一高の文化部は、映画部、新聞部、落語研究部など、当時他校にはないものも多く、多彩だった。これも先輩達の築いてきた伝統の賜物と言っていいだろう。新入生歓迎会や学園祭の展示・発表、対外的なコンクールなどで活躍していた。体育会系とは違った青春の過ごし方もまた豊かな時間だった。

■「カメラ欲しい」　一組　櫻伸一郎

それが写真部入部の理由。当時の一眼レフは高く、高校生の身分で買える代物ではない。スポンサーを説得できるのは「部活動」だ。

部室はというと古い長屋で、暗室に面積を取られるために狭い。なおかつ現像液、定着液で酸っぱい香りが充満している。一年生にとってこの暗室は危険な場所だ。写真部の伝統行事だろうか、そこでは怖い先輩達が人生の教訓を教えてくれた。そして、西湖での合宿。バンガローに泊まって自炊。合宿といえば聞こえはいいが、遊び要素のみの行事だった。今思えば、ゆるい部活である。

ところで、写真部には特権がある。高校総体時の公欠だ。総体写真のコンクールは部活の一大イベント。各高校の写真部員達が自慢のショットで応募してくる。あらゆる競技を撮影したが、なぜか新体操の会場には各校のカメラマンが群がっていたような気がする。

ほとんど幽霊部員に近かったが、このカメラのおかげでいろいろな人と出会い様々な経験をさせてもらった。デジタルカメラが全盛の現代。今やヴィンテージとなりつつある思い出のスチールカメラは壊れてしまったが、今も手元にある。

■三軒長屋

六組　雨宮利之

自転車置場の東の隅、そこには「化学、生物、電気物理」という文化部三軒が同居した木造平屋の三軒長屋がありました。

高校時代、ここが私の居場所であり、ここが生活の中心でした。いまだに親交が続く友とも出会い、恋もしたし、今では言えない愚行もしました。ただただ、「あの時」の自分があったから、今の自分があるのでしょう。

そして、長屋の住人しか判らない「貧民保護法」に縛られた大貧民の思い出……。いつかまた、童心に戻って興じたいものです。

■パンジー

七組　前田(保坂)和彦

そもそもなんで私が園芸部に参加することになったのかが思い出せない。生徒会に入っているのに……。卓球部をやめているのに……。

気が付いてみれば朝に昼に夕方に、パンジーのしおれた花弁を摘む日々。なんでしおれた花弁を摘むのかというと、それをすれば種がつかないから。また花を咲かせようと新しいつぼみが現れて花が長持ちすると教えられたからなのだが……。

なんか気が付くと私一人がえんえんとこの単純作業をやり続けていた。一高の花壇は広い。その端から端までかなりの数のパンジーが植えられている。かなり足腰に疲労がたまる作業である。端から端まで数日かけてこの作業をやり、そして終わるころには最初の方は花を咲き終えしおれているので、また同じ作業がエンドレスで続く。

手塩にかけた甲斐あって、パンジーはかなり長い間みごとに咲き続けたと記憶している。今でも春に花壇のパンジーを見かけると手がむずむずする。

私達が入学して感動した美しい花壇はこんな苦労があって保たれていたのだった。今は本館が建てかえられたこともあって校舎の配置も変わり、たくさんあった花壇のほとんどは失われている。

記憶に残る行事の数々

日常から少し離れて

一高は行事の多い学校だった。スキー教室、修学旅行など他校でも行われている行事もあったが、球技大会が春秋二回、期末試験の後、一週間短縮授業にして行われるなど、特色のあるものも多かった。

それに参加する生徒の態度は千差万別。のめり込んで一生懸命になる者、斜に構えて傍観者を決め込む者、それぞれのあり方があり、それがよかった。

■走る学校

五組　増村双葉

好きな先輩のいる別の高校に進みたかったです、実は。一高なんて、強行遠足はあるし、そのおかげで修学旅行は短いし。選んでないのに先生方はふた言目には「伝統、伝統」。典型的な無気力生徒。

一学期は一万メートル走、二学期は強行遠足、三学期は駅伝大会、球技大会は緑ケ丘まで使って一人三種目。こんな高校、めったにあるもんじゃありません。

勉強とのバランス？　成績はともかく、長距離は無心になって進むものだと学びました。

■駅伝大会

四組　古屋賀章

一高最大のイベントは強行遠足ですが、それとは

また一味違った「きつさ」と「緊迫感」のあったイベントが「駅伝大会」です。全校生徒の応援とプレッシャーを受けて、緑ケ丘の裏山を全力疾走。タスキの受け渡し場所の緑ケ丘体育館駐車場は、一種独特の雰囲気に包まれていたのを覚えています。

大会に向けた練習もきつかった。大会前には、どこの運動部も通常の部活動を終えた後、必ず駅伝大会のコースを走っていました。写真は、駅伝コース最大の難所、「心臓破りの坂」です。多くの道路は舗装されたり、ガードレールが設置されて整備されましたが、このコンクリート敷きの坂道だけは当時のまま。部活のトレーニングメニューに、この坂での「ダッシュ駆け上がり」がありました。コンクリートに刻まれたギザギザをもうろうと見ながら這うようにして走った記憶が蘇ります。

三〇数年ぶりに現場に立つと、歩くのが精いっぱいで、走るなんて考えられない急な坂です。成人病が気になるこの齢となっては、「心臓破り」ならぬ、「心臓発作の坂」ってとこでしょうか。

■修学旅行の親睦は永遠に… 八組 川窪(小菅)美香

二年生の一学期に行われた修学旅行は三泊四日、京都・奈良への旅であった。方面は中学の時と同じでも、事前研究や班行動のルートを自分たちで選ぶなど、少し大人になったような気もしたものだった。

私達の修学旅行は京都・奈良への旅であった。班行動の一日を今でも克明に覚えている。

三十三間堂で背中を丸めて拝むI君の姿は、住職かと見間違える程渋かった。

公園でお弁当を広げて一休み。お弁当に群がる鳩は何故か太った鳩ばかり。二重顎の鳩に私の名前が命名された(涙)。

碁盤の目の様な地図だったが迷路となり、制限時間数十秒前に旅館に到着。珍道中だったが故に、今だにこの仲間との付き合いは続いている(笑)。

一高祭の思い出

一高祭は秋に三日間の日程で行われていた。一日が体育祭で、二日間は文化部の発表・展示の他クラス対抗のさまざまな催しなどが行われた。クラス対抗は種目が多く、仮装行列や合唱、模擬店、早飲み大会、女装・男装するミスター&ミス一高、歌を披露する夕べのつどいなど盛りだくさんだった。今回はなぜか夕べのつどいについての寄稿が目立った。

■三年生最後の学園祭 四組 中込誉世夫

夕べのつどいのクラスの出し物を引き受け、クラスメートバンドを結成した。キーボード小野、ギター相馬、尾沢、ベース渡辺、ドラムス中込。曲はオフコースの「愛を止めないで」だ。

歌のキーが高いこともあり、影のリーダーである小野氏の強い希望により歌は女子三名を登用。練習は放課後、私の自宅の応接間。一つの目標に向い、

皆で演奏した思い出は今でも記憶に残っているが、メンバーや協力してくれた友人知人に今も感謝している。

■夢舞台

一組　古屋秋雄

私の一番の思い出は、一高祭である。それも各組対抗のステージ競演である。

小笠原君が「三年間の思い出としてサプライズを起こしたい！　古屋君、ボーカルをやってくれ」と急に誘ってきた。「そんなことはできないよ」と一度は断ったが、「森屋君もやるからやろう！」といってきたので受けることにした。

出し物は「モンローウォーク」で、学園祭当日まで猛練習した。優勝はできなかった。でも、ステージ場内の笑いを大いに誘い、恥ずかしさもあったが、感動し、良き思い出となった。

今でも彼らとは親友であるが、同窓会に対する彼らの活動を通じて、忘れかけていた「一高への思い」及び「一高魂」を目覚めさせてくれた。もう一度、同級生とともにあの感動を得たい。

■「長い夜」

三組　小泉一昌

「長い夜」といえば、三年の時の学園祭の夕べのつどいを思い出します。

その当時、松山千春の大ファンで、コンサートに行ったり、夜中にオールナイトニッポンを聞いていました。

夕べのつどいの出し物で「長い夜」を歌うことになり、思い切り歌いました。確か上位に入賞した記憶があります。

ちなみに、その後、大学時代、就職してからも歌い続け、この歌のうまさ（？）で、今の嫁さんと付き合うきっかけになりました。本当にいい歌です。

夕べのつどいばかりでなく、皆それぞれの持ち場で頑張っていたようだ。

■体を張った模擬店

三組　吉澤直人

学園祭には、確か、模擬店があったと思います。中庭辺りに、軒を並べあいました。

二年生の時は、オリジナルという名の数学の問題集、これの「虎の巻」を作り、高値で売りました。クラスのみんなで分担し合い、難問を解題。完売したと思います。でも、売りさばいたお金がどうなったのか、定かではありません。

三年生の時は、そんな知略を巡らす余裕はありませんでした。多量の寒天を仕入れ、顔が出るフレームを作り、数回百円で、指名の人をそのフレーム内に入れ、顔をめがけて寒天を投げつけてもらう…そんな原始的なゲームを試みたのでした。後輩から指名されても、決して拒否できず、どういう恨みか知らないけど、何度も何度も顔に寒天をくらい、長髪がガビガビになった記憶が残ってます。この時の売り上げも、どうなったのか、定かではありません。

■ミスター&ミス一高

四組　清水賢一

一高祭の「ミスター&ミス一高」に私は三年間携わり、大げさだがこれを極めようとした。

一年目は貫一お宮のお宮役を演じた。「金色夜叉」で賞は取れないと、担任の山紘先生に忠告されたが、校庭の部室の屋上を舞台にお宮の哀しみを全身で演じ切り、その演技力が注目を集めて入賞を果たした。

翌年からは脚本演出に回り、一年目はロミオとジュリエットを正攻法でやり、三年目にはチャップリンを主人公に喜劇を作った。勉強の合間に朝までかかって脚本を作り、ナレーションを吹き込んだ。くだらないことに真剣に取り組んで、それを笑ったり馬鹿にしたりする者は誰もなかった。そういう純粋な一高生であった。

これも一高だからこそ

いわゆる行事とはだいぶ趣が異なるが、生徒総会も形骸化されがちな他の学校のそれとは全く違う中身だった。年間行事予定に組み込まれたものの他に、生徒会長の立候補者がいないなど問題があると、授業を短縮して臨時の生徒総会が開かれ、議題によっては発言者も多く、活発な議論が行われた。伝統の講堂を取り壊す際も生徒総会で議論があった。このようなとき生徒会から臨時生徒総会開催のお願いをすると、学校は短縮授業や部活の調整などできるだけの対応をして開かせてくれた。

■生徒総会での叫び声

三組　吉澤直人

在学中、朝日新聞の地方版に、伝統校だった一高の凋落ぶりを報じた記事が掲載された。東大を受験する者が一人もいなかったことが「槍玉」になったらしい。ひとつ、生徒総会に執筆した記者を招き、一高の凋落ぶりを議論してはどうだろうと、単純に思いつき、生徒会の仲間とともに、記者を呼んだ。

総会は、かつてないほどの盛り上がりを見せた。今考えてみれば、単なる集団自己弁護に過ぎなかったのかもしれないが、総会の場で、誰かが叫んだあの言葉は、今も忘れることができない。

「偏差値で人間が測れるのか!!」

あれから、一五年あまり。偏差値という計測器は、今なお健在……

っていうようなことを、サブ幹事の時、記念誌へ寄稿させていただいたが、世紀が変り親幹事となった今も、世の中におけるこの比較対照モードは、総じて変らない。

このような行事の他に私達が在学中には特別な出来事があった。百周年記念事業である。百周年記念館の建設をはじめ、様々な催しがあったようだ。生徒だった私達が、当時どれほど実感を持って参加していたかは怪しいものだが、長い歴史の中の大変な節目の年に立ち会っていたわけである。

■百周年記念式典

四組　小林(三輪)英子

県民会館で行われた百周年記念式典は大勢の来賓を迎えて盛大に行われた。

先輩である神戸電鉄社長中田大三さんの講演は人生の教訓として、今でも時々思い返している。また、歴代の校長先生が招かれ感謝状が贈られたあと、臼田のおばさんこと依田トミ子さんが登壇し、誰よりも大きな拍手で会場が包まれたことも忘れられない。

一高の先輩であり、当時すでに日本オペラ界の重鎮であった平野忠彦さん、林ひろみさんたちのコンサートは特に想い出深い。平野さんに花束を渡す大役を仰せつかっていたからだ。緊張しすぎてよく覚えていないが、握手した平野さんの手が大きく温かかったことは記憶に残っている。

後日談だが、私があるオペラ評論家の本の編集担当になり、この折の話をすると、平野さん、林さんと親しかったその方は、孫ほどの年である私とすっかりうち解けてくださり、よい仕事ができた。先輩はありがたいものである。

一高と言えば強行遠足

スタート前からドラマが

甲府一高の最大の行事はなんと言っても強行遠足である。男子は甲府一高から小諸まで、女子は高根東小学校から小海まで、自らの限界に挑んだ経験は、多くの人に鮮やかな想い出として刻まれている。

一〇月に三日間（最後の一日は登校して無事を確認して解散）の日程で行われていたが、各人の強行遠足は実はそのだいぶ前から始まっていたようだ。

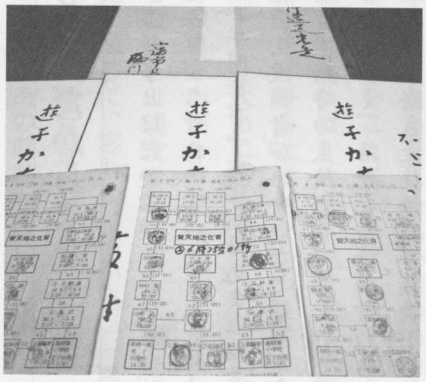
■経験から自信へ

二組　中山辰人

話題が集まる伝統行事の強行遠足ですが、私にも小さなドラマがありました。

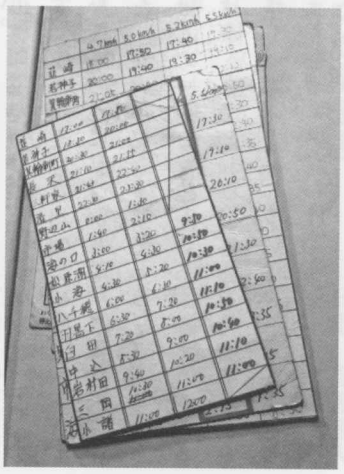
中学生の時からある病気になって、当時甲府共立病院に掛かっていました。強行遠足への参加は、主治医（実は中野真Drのお母さん）の「責任は持てません」の一言があり、参加するには本人の同意はもちろん、親の承諾がなければならない状況でした。伝統行事である強行遠足にどうしても参加したいという希望があり、主治医の先生の注意もよく聞き、毎年参加前には検査をしていただき、何とか無事三年間参加する事ができました。おかげで貴重な体験となり、結果も自分の自信に繋がり、現在にも活かされています。

高校の三年間は強行遠足、部活など自分の能力を試すいろいろな経験ができたと思います。経験が有ると無いとでは雲泥の差となり、言動に大きく差が出来ますよね。これからもいろいろなことにチャレンジし人生を楽しんでいきます。一高に感謝。



■緻密強行

七組　杉山　誠



これは、強行遠足の計画表である。自分で言うのもなんだが、緻密に作ったものだ。時速四・七キロ、五・〇キロ、五・二キロ、五・五キロにピッチを設定し、体力に応じて、各救護所の自分なりの到着時間を一覧にしておいた。おかげで、一年の時は駄目だったが、二、三年の時には、小諸に到着することができた。友人達には意外に思われるかもしれないが、我ながら昔から緻密だったと思う。高校のとき培ったこのプランニング魂が、現在の仕事に役立っていることは、言うまでもない。

■強行遠足と渡辺明先生

一組　窪田哲也

私には強行遠足の記憶がほとんどありません。その理由は、高校三年間で一回だけしか小諸まで到達していないからです。

私は高校時代に野球部に入っていたのですが、一年生と二年生のときは大会の試合前日が強行遠足の日だったため、野球部全員が翌日の試合に備えて強行遠足は韮崎止まりだったのです。

一年生のときは我慢しましたが、二年生のときは我慢できず、当時野球部部長であり、クラス担任でもあった渡辺先生に直訴しました。「小諸まで行きたいです！」渡辺先生は普段でも真っ赤な顔なのに、その顔をさらに真っ赤にして、「おまえだけを行かせるわけにはいかん！」怒鳴られました。

大人になり、初めて強行遠足のお手伝いをさせていただきましたが、当時の強行遠足に纏わるこの思い出が蘇りました。渡辺先生は二年生と三年生（ともに男子クラス）の担任の先生であり、野球部の部長としても大変お世話になりました。いい思い出です。

新記録樹立

私達が三年生の時、トップでゴールをした野沢君はそれまでの小諸到達記録を塗り替えて一二時間五六分の新記録を打ち立てた。

■強行遠足での思い

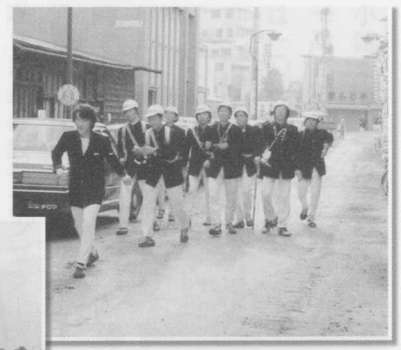
一組　野沢清次

一年生、日高先輩に、「二本目の電柱まで、次は信号まで走るぞ」と、一緒に歩き走ってもらい小諸到着。二年生、中山君と韮崎から一緒になり、小諸には六人でゴール。岩村田付近からは、みんなのペースが早く感じ、何とか遅れないようについていった。

三年生、弘法坂を歩いていた六人の集団から、中野君と二人で抜け出し、臼田手前で疲れの見えた中野君と別れ一人で小諸へ向かった。

暗闇を一人で歩いていると、トップを目指す気持ちと、一・二年生、先輩や仲間と一緒に歩き、走ったことを思い出し、一緒に来れば良かったかなという気持ちが交互に起きていた。

卒業後も、ふっと「みんなと一緒に行けば良かったかな」と、何とも言い表せない気持ちになることがあったが、昨年一〇月、小諸まで復活した強行遠足に交通係として参加し、通過する生徒たちの思い思いの走りや歩きを見て、こんな気持ちも懐かしい思い出にすることができた気がする。



女子の強行遠足

女子ももちろん頑張っていた。マラソンとほぼ同距離の小海への到達率も九割を超えていた。

■「縁あって」

九組　清水友子

あれはもう三五年前のことになるのだろうか。一高伝統の強行遠足のことである。男子ばかりクローズアップされる一高の強行遠足ではあるが、私達女子も強行遠足に備え、学校の往復を歩いては足腰を鍛えたことを覚えている。まだ薄暗い中、緑ケ丘に集合し、バスで高根東小学校まで行き、そこから小海を目指してスタートしたのだ。

……と、ここまでは誰もが記憶に残っていることと思うが、実はこの一〇年後に運命的なことが起こったのである。

私は縁あって高根町に嫁ぐことになった。そしてまたまた縁あって高根町で保育士として働くことになったのだ。しかもその仕事先の保育園があのスタート地点となった高根東小学校に隣接しているしらかば保育園であったのだ。こんなことってあるんだなと運命的な出来事に驚いたことを覚えている。

今も私は保育士として働いている。長沢の第一検印所も弘法坂も清里も今では我が庭のようなものである。……ちょっとオーバーかな。

毎年一〇月になると、ちょっと先輩ぶって一高生にエールを送る私である。

今やこれも伝統の域に達しているお守りや、リンゴを持って帰るという風習もやはり想い出の一つである。今と違い、お守りは表向きは禁止ということになっていたが、半ば公然と行われていた。先生方も承知していて目くじらを立てることはなかった。

■元祖！アップルパイ　八組　中川（中沢）美穂

同窓会の一高キティちゃんのストラップ。パッケージをよく見れば、ダニエルくんがキティちゃんに小諸のりんごを渡しているではありませんか！

三〇年前女子高生だった私は強行遠足用に作った自分のリュックとお揃いの布で意中の先輩にお守りを作って渡しました。強行遠足から戻って来た先輩は痛そうに足を引きずりながら、「小諸のじゃなくてごめん」と言って、臼田のりんごをお守りのお礼に私に手渡してくれました。

リュックに詰められて少しキズがついた感じのりんごは、先輩のいろんな想いが詰まっていて、とても切なくて、貴重な気がしました。さくさくと一人で食べてしまうのはもったいない気がしました。そこで、りんごを煮て、小さなアップルパイを作って（もちろん自分も食べましたが）先輩にあげました。…という、すでに半分私の妄想になってるくらい遠く懐かしい思い出があります。現役生は、お守りをあげてアップルパイを作ってあげる、までが習わしになっている…とか？

ということは、アップルパイの元祖は私かしら？

忘れられない人々

恩師や級友との出会い

一高時代に出会った多くの忘れられない人、忘れられない体験がそれぞれにある。中でも薫陶を受けた先生方や懐かしいクラスメートの思い出は尽きない。

■一高で受けたリーダー教育　一組　上田俊彦

旧本館一階最東部の体育教官室。ハンドボール部監督の千野恒夫先生から厳しい教えを受けた思い出の場所です。私は主将だったので、リーダーとして皆を代表してしかられることも多く、当時のことですから、時には叱責と共に教官室前の廊下での正座を命ぜられたこともありました。人通りが多く、冷たいテラゾー（人工大理石）床での正座は、肉体的にも精神的にもつらいものがありました。

それから数十年、私は企業の、あのとき隣に座っていた副将の八田君は高校ハンドボール界のリーダーになりました。『ノブレス・オブリージュ（高貴なものは義務を果たさなければならない）』。先生のこの教えを胸に、これからも日々精進です。

■保坂憲治先生　六組　深沢（内藤）千春

三年六組の担任は保坂憲治先生でした。英語の担当で物静かな文学青年風の先生に体育会系の私はなじむことができず、苦手意識を持ったまま卒業の時を迎えました。

卒業後、先生と顔を合わせる機会が二度ありました。一度目は銀座通りでばったり。私の就職先が経営倒産、再建と困難な時期にあった頃で、先生は「大丈夫なのか。そのまま勤め続けるのか」と親身に声をかけてくれました。私は友人と、先生も同僚の方々と連れだっていたこともあり「大丈夫です。残ります」とだけ答えて別れてしまいました。二度目はクラスメートの志村好美さんが若くして亡くなった葬儀の席で。仕事を抜けて参列した私は、まだ話したそうな先生に「帰ってもいいですか」と素っ気なく席を立ってしまいました。先生は悲しそうな顔をしていました。自分の態度を後悔したものの、心の隅に追いやってごまかしました。先生の突然の訃報が届いたのはそれからしばらくしてのことでした。

小野君たちが、卒業に際して録音してくれた「保坂先生の話」から、あの頃の先生の温かさが伝わっ

てきます。私はどうしてあんなに頑なだったのだろう。今なら心を開いて先生と話したいことがたくさんあるのに。先生のことを思い出すたびに懐かしさと苦い思いが一緒に湧き上がってきます。恩師を囲み賑やかな他のクラスが羨ましい同窓会です。

■まさに青春＝二年六組

八組　川窪(小菅)美香

一高＝青春＝二年六組だと、私は胸を張り、言わせてもらう。

肝心のお勉強はさておき(苦笑)、何事にも一丸となるまとまったクラスであった。古典の授業中は紙に包まれた時限爆弾が回り、物理のテストは赤点の自慢披露?!　野球部が大勢いたから球技大会も大活躍で、沢山の賞状をゲット。昼休みは毎日演芸大会。

私の成績はクラスの盛り上りに反比例したが、本当に毎日が青春そのもの。こんな素晴らしい仲間に出会えた事は生涯の宝だと思う。

学校外でも

高校生活は学校の中ばかりではない。校門を出て、そこで随分お世話になった方々もたくさんいる。

■Wおばあちゃん

一組　功刀浩樹

高校時代、世話になったおばあちゃんが二人いる。

一人目は毎年お世話になった、臼田のおばあちゃん。臼田を目指し、まずはがんばり、おばあちゃんに会いリンゴをもらうと、もう一踏ん張りできた。小諸まで、フラフラになりながら、三年間、完歩。一高百周年記念の際は、一〇〇位を狙ったが、結果は一〇一位。

「惜しい！　リンゴ食い過ぎた!!」……苦笑い。

二人目は毎日お世話になった横店のおばあちゃん。ほぼ毎日、部活帰り、サッカー部は横店へ。どんな時でも、優しかったおばあちゃん。おばあちゃんの温かい雰囲気の中、サッカー部何人かで、ワイワイ喋りながら餃子カップラーメンを食べたのを思い出す。今、自分は、飲食店をしながら、ああいう居心地の良い雰囲気を客に提供したいのかもしれない。

正門を出て正面の前店(望月商店)と左手の横店(なかざわ商店)、当時はこの二軒までは暗黙の了解で外出を許されていた。昼休みにちょこっと買い物に出かけたり、放課後にたむろしたり。自然と前店派と横店派に分かれていたようだ。残念ながら現在前店は営業していないが、横店は健在である。

もう一つ、一高近くにあったお店についての話。

■愛文堂の想い出

六組　雨宮利之

現在の在校生の諸君や最近の卒業生の方はご存じないだろう。同窓生でも、レンタルビデオ屋と思っている方も多いかもしれない。しかし、当時高校生だった私にとって、愛文堂は今も懐かしい貸本屋だった。

話し好きで気さくな女店主と、たわいのない世間話を、本も借りずに長い時間したものだった。部室とはまた違った憩いの場で、この店への寄り道は、私や友人の日課となっていた。

今思えば、貸本(学園漫画)を読みながら、当時目指した教師の夢を膨らませたのもこの店だった。夢は破れ、時が過ぎて、今は冴えないおじさんになってしまったが、愛文堂の明かりはほんのりと私の胸に灯っている。

人ではないが、総合体育大会や一高祭、強行遠足など何かにつけ大変お世話になったのが一高生の守り神「お御崎さん」である。

■御崎神社

六組　藤原辰巳

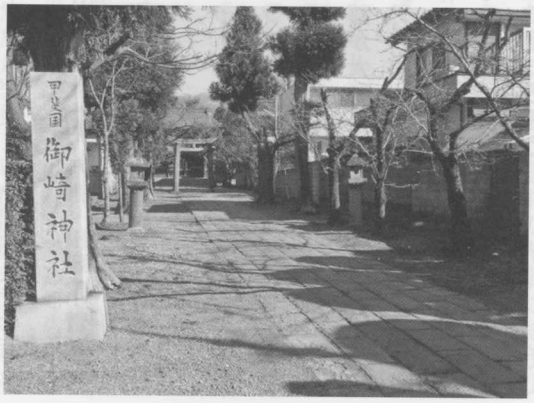
一高卒業生なら誰でも知っている?場所。

部活の試合の勝利祈願や、強行遠足の完走祈願で訪れた場所。

部活の試合はなかなか結果が出なかったが、強行遠足では三年間完走でき、三年の時には目標だった五〇番以内でゴールする事ができた。

この文章を書いている今、そのときのお礼参りをしていないことに気がついた。

三〇年以上経ってしまったが、お礼参りに行こう。



応援歌にもなっている「お御崎さん」。校歌の作詞者である上條馨先生は甲府中学・一高の教師でもあり「お御崎さんの神主」でもあった。

卒業を前に

別れの季節

クロニクルを紐解くと、私達が高校生活を送っていたのはソ連のアフガニスタン侵攻、その後のモスクワ五輪のボイコットなど冷戦の時代だった。エジプトのサダト大統領の暗殺、英国のチャールズ皇太子とダイアナ妃のご成婚など世界では様々なことが起こっていたが、今となっては確かに高校時代のことなのか定かでないことも多い。逆にある出来事が当時の自分と結びついて鮮明に蘇ることもある。

■身延線とジョン・レノン

四組　雨宮和久

僕は身延線で通学していた。鰍沢口から甲府駅まで一時間。駅から一高まで徒歩で二〇分。エクランが出現する前の甲府駅は、各ホームと、それらをつなぐ連絡橋のみのシンプルな構造。改札の内側には立ち食いソバ屋と売店が一軒ずつ。

一九八〇年一二月のある朝、六郷から通う小林君が、ジョン・レノン射殺記事を車内で見せてくれた。実を言うと僕はポールの方が好きだったので（ビートルズ解散後、ポール・マッカートニーは自身のバンド、ウィングスで活躍していた）、はじめのうちはただウンウンとうなづいていたが、語り続ける小林君に次第に感心し、小林君をしてこれほど熱く語らせるジョン・レノンとはすごい奴なんだと思った。「イマジン」を初めて知ったのも高校時代だ。篠原君から借りたLPをカセットテープに録音して聴いた。

ジョン・レノンの訃報の翌年、三年生になった私達は一つの別れを経験した。二学期に入ったある日、同級生の一人が急逝したのである。

■白い煙になった君

一組　小笠原寛

突然、朝のホームルームでの事……君の訃報を聞いた。

「何で、嘘だ……」

先週は生徒会メンバーで中庭花壇の堆肥入れ替えを行っていた。作業が終わり、前店からアイスキャンディーとチェリオを買出しして、君は、いつも通りの我がままぶりを発揮し、何故か一人両方を食べ飲んでいた。あれが、最後だった。

教会で「賛美歌」を歌った……生徒会長バルタンが、前夜遅くまで皆で語り合い考えたお別れの言葉を君に贈った。最後のお別れに向かうバスの中、ポツリ…ポツリ…と誰からとなく、君の思い出、たくさんのやり残した事があっただろうな…と語る。

愛宕山上の青空へ、白い煙になった君が昇っていく。お別れの一高校歌は君に届いていただろうか…。

今も、歌うと思いだす……きつね目の、はにかんだ笑顔の君。

もうあれから、三十二年だな。

心臓の弱かった彼は一年の時も二年の時もドクターストップがかかり、小諸に行くことはできなかった。最後の強行遠足、クラスメートの一人が彼の検印カードを持ち、小諸までの道を完走した。

残り少ない日々の中で

学園祭、強行遠足など秋の行事が終わると、三年生に残されているのは、自分の進路に向けて努力する日々だ。進学を目指す者も就職する者も何かに追い立てられるように過ごしていた時期である。それは同時に一高を去る日が近づいたことを意味していた。

■道を切り拓く

四組　小林(三輪)英子

私達は後に「新人類」と呼ばれる共通一次世代だった。それは自分で考えたり工夫したりせず指示を待っているだけで、ことばや常識が通じないといったかなり否定的なイメージである。でも、私は一高の仲間をそんな風に思ったことはない。

当時、一高には地学の授業はなかった。しかし、共通一次は理科は物理、化学、生物、地学の中から二科目必修である。物理、化学の苦手な文系の生徒にとって、かなり厳しい状況である。そこで、数人が集まって、物理の小宮山先生のところへ地学の課外をお願いしに行ったそうだ。いくら同じ理科だとは言え、違う科目を教えるには相当なご苦労があったと思うが、小宮山先生は引き受けてくださり、彼らは地学で受験することができた。私自身も二次試験の日本史の論述問題がとても歯が立たないと思い、浅川保先生に添削をお願いしてご指導いただき、無事合格することができた。

勉強に限らず、私達は自分で自分の足りないものを判断し、道を切り開くべく行動していた。そして、そういう私達を先生方はさまざまな枠や前例を超えて応援してくださった。これは受験ばかりでなく、多くの面でそうだったように思う。

若者にとって卒業は出発と同義語である。思いを残しながらも、旅立ちの準備は進んでいた。

■校　歌

七組　三井(倉鹿野)伊春

自分の子供達の校歌が頭に入ってきてしまい、今では小中学校の校歌は歌詞を見ないと唄えませんが、一高の校歌はいまだに空で唄えます。応援練習で鍛えられたこともありますが、もう一つはこの額があったからだと思います。

結婚前は私の部屋にあり、その後は廊下の本棚の上にいまだに置いてあるのがこの一高の校歌の入った額です。実家に帰ってこの額を目にするとつい校歌を口ずさんでしまいます。

私たちが二年生のときに一高は百周年を迎え、記念式典が開かれました。私はクラスの仲間と共に受付をしていて式典の途中から会場に入ったのを覚えています。これまで高校時代の思い出を語り合う機会がなく、漠然とこれを百周年の記念品として買った気がしていたのですが、今回同級生にきくと、卒業を前にして注文したものだったようです。私のものは黒地に金色の文字ですが、他にも赤や青など何色かあったようです。

私が結婚した後もどうして残しておいてくれたのか、今は亡き両親の想いはわかりませんが、取って置いてくれて、感謝です。とはいえ、私に試しに校歌を唄わせるのは勘弁してくださいね。

■高校卒業時に収録した録音

一組　小野泰史

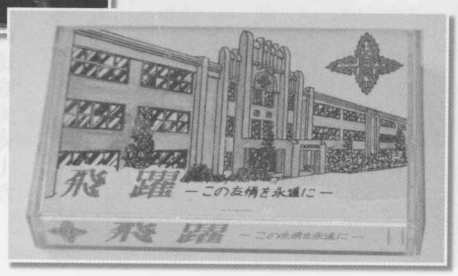
卒業の数ヶ月前になって、友人や恩師の声を残しておきたくなり、八木君と藤巻君と三人で、デンスケ担いでマイク片手に録音に走り回りました。その当時はビデオなどというものは入手できず、カセットテープへ音声のみの録音でした。放課後、部活などで残っている人に頼んで集まってもらい、校歌の

録音をしました。下級生も手伝ってくれました。

録音の最後に日新鐘の音色を録音したいと思って、職員室へ頼みに行きました。一斉放送で録音の為に臨時に鳴らすことを校内に伝えてから、渡辺明先生が力強く鳴らしてくれました。

その後、録音した声を編集し、BGMを入れて、一本のカセットテープに仕上げました。ジャケットは、藤巻君が得意なイラストで旧校舎を入れた絵を描いてくれました。出来上がったものはダビングして、出演して頂いた方々にお送りしました。

先日、そのテープを聴き直してみました。懐かしい先生方や仲間たちの声が再生され、一高時代の生活が蘇ってきました。他界された先生の貴重な話は、特に心に染みました。

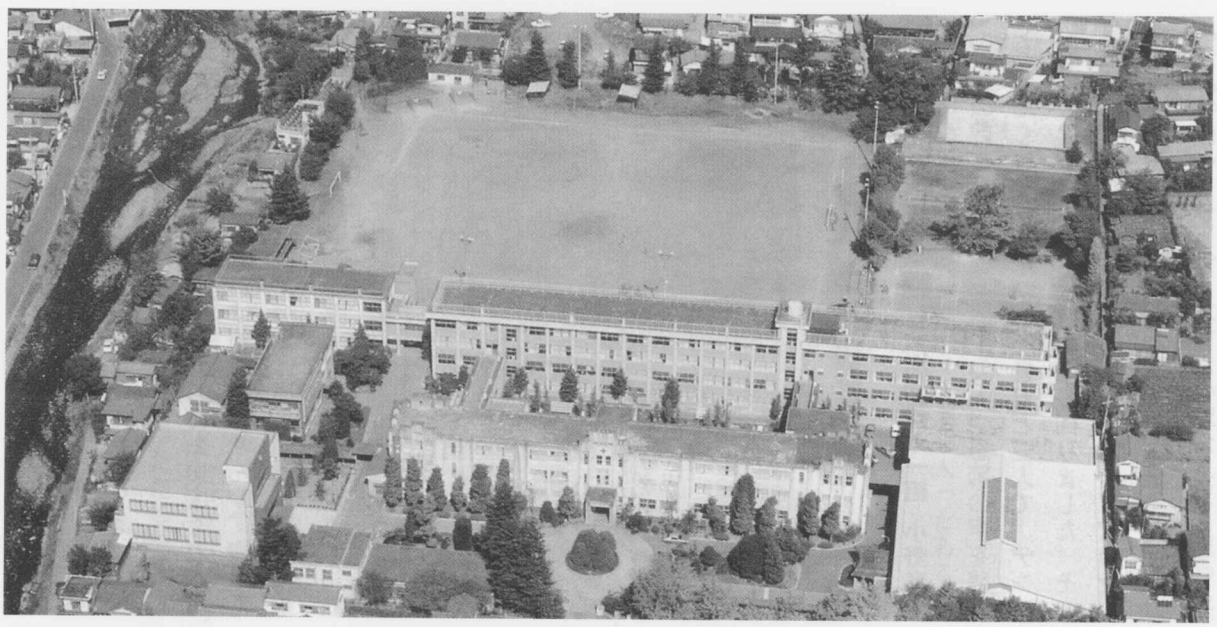


小野君、八木君、藤巻君が録音してくれた先生方のお話の一部は、この記念誌の二一ページに掲載されているQRコードを使って聞くことができる。

一九八二年三月一日、私達は甲府一高を卒業した。そこでどう過ごし、何を学んだかは一人一人違うだろう。今回この特集を組むにあたって、多くの同級生から思い出を語ってもらったことで、自分の知らない様々な一高の姿があったのだと知ることができた。

一三四年の歴史の中では、母校はさらに多くの顔を持っているのだろう。先輩や後輩の皆様は、それぞれの時代や制度の中で、私達とは違った青春を過ごしていたに違いない。しかし、その違いを超えて甲府中学・一高を貫く何ものかが脈々と息づいていることもまた確かである。それが何であるのか、一言では言い表し難いが、多くの同級生のことばの端々から、おぼろげな輪郭ではあるが、形となって見えてくるように思われる。

さて、総合選抜制度のもとたまたま一高に入学した私達は、そこで過ごした三年間で果たして一高生になったと言えるのだろうか。こうして同窓会の当番幹事を務めている今、それぞれの心の中にその答えはある。



広告目次

あ

アーク・インシュアランス……90
アーバンハイツクリニック……90
㈲アイシーエス山梨……87
㈲アウテリアあかざわ……88
青山シーリング……69
医療法人甲療会　赤坂台病院……64
秋山酒類販売㈱……69
㈱朝日新聞甲府中央……90
芦澤歯科医院……84
芦沢整形外科医院……81
アステラス製薬㈱……66
アストラゼネカ㈱甲信越支店……91
㈱アセッツアールアンドディー……90
アップフィールド……80
㈱アドヴォネクスト……48
アトム不動産㈱……92
㈱アミノ測量……89
㈲雨宮オートボディーサービス……75
医療法人雨宮病院……82
新倉観光バス㈱……88
有泉医院……68
アロークラフト……13
㈲アンブレラ……74

い

イイクボ自動車販売……75
飯田鉄工㈱……40
㈱石友……7
磯部会計事務所……94
磯部歯科医院……72
イタリアンレストラン・バーるびい……88
㈲いち囲海鮮酒房さけくら竜王店……85
一瀬板金……89
一宮温泉病院……63
㈲一志石材店……73
㈲イッセイ……68
井出成康堂……69
学校法人伊藤学園（甲斐清和高校）……71
井上建設㈱……67
㈲井上建装……85
イノウエ住設……91
今村歯科医院……76
今村耳鼻咽喉科めまい・難聴クリニック……59
イメージワークス……80
岩間農機㈱……74
㈱印傳屋上原勇七……67

う

ヴィーエヌトレーディング㈲……72
上野会計事務所……67
植野興業㈱……88
㈱魚宗（魚そう本店）……78
うさぎ会……47
臼井歯科医院……91
㈲内川自動車工業……71
内田歯科医院……76
内田皮ふ科……66
うなぎあけぼの……69

え

エーザイ㈱……93
英雅堂グループ……25
㈲駅前サービス……73
㈱エコマック……86
㈲銀座　江戸家……74
㈱エヌディエス……65
㈱蛭子屋酒店……74
江間歯科医院……92
エンゼル動物病院……81

お

㈱ＯＭＴ……76
㈱オオキ……59
大久保内科呼吸器科クリニック……61
㈱大里代行……91
太田整形外科……87
㈱太田屋……89
大森歯科医院……84
㈱小笠原商会……87
岡島百貨店……33
㈱岡酒類店……70
岡田整骨院……40
小川歯科医院……72
㈱オギノ……15
㈲荻野造園……79
㈱おぎはら……88
㈲オギハラ介護サービス……71
荻原組……94
おぐちこどもクリニック……17
長田組土木㈱……33
長田産婦人科クリニック……62
おさだ内科クリニック……93
㈲オサリン……85
小澤外科内科医院……78
小沢歯科医院……87
小沢耳鼻咽喉科アレルギー科クリニック……87
小澤畳工業所……79
㈲オズ・プリンティング……60
おそうじや本舗甲府営業所……91
小田切塗装㈱……90
小野薬品工業㈱……43
音楽のある人生を……93

か

カーイノベーション……92
カーテンじゅうたん王国マイホームインテリアサービス㈲……55
㈲カーボディーショップ中川……54
開運堂……57
㈱甲斐延……80
㈲甲斐絹屋……78
㈱甲斐興運……79
㈲甲斐資産評価システム……48
㈲甲斐地所……73
甲斐ゼミナール……28
甲斐直心館　鷹野道場……90
甲斐日産自動車㈱……55
海沼商事㈱……67
カクテルバーくらぶはうす……80
科研製薬㈱……44
片柳学園……32
㈱加藤商会……73
かね正金物……74
社会医療法人　加納岩……20
カフェ　ロッシュ……69
釜めし　たぬき……74
ＧＡＬＡ　ＨＡＩＲ……88
㈱カワイ……41
㈱河合楽器製作所甲府店……91
河住歯科医院……93
㈱カワチヤ装飾……84

き

キープ協会……87
菊地原歯科医院……67
北野医院……51
㈲キタムラ……85

吉川外科・整形外科医院……63
橘田耳鼻咽喉科医院……72
㈱きぬや……87
ギフトランドSATO……75
㈲きものあさかわ……35
キュイエット……60
特定医療法人南山会　峡西病院……49
京商㈱……14
㈱共生会NAC湯村……37
京設計㈱……57
協同電気㈱……93
共同電設㈱……83
共同プリント社……78
峡北シルバーケアホーム……84
㈱京梨不動産鑑定……37
杏林製薬㈱……61
清里郵便局……84
㈲キング珈琲……89

く

貢川進徳幼稚園……70
㈲草津温泉……56
割烹くしだ……73
窪田道也税理士事務所……48
医療法人淳道会　限部小児科医院……61
クラブ悠葵㈲KENT……82
㈲クリーンアシスト……78
㈱クリエイション……61
クリニックいのうえ……79
グレイスコーポ島田……78
群芳園……77

け

慶雲館……47
㈱恵信会　恵信甲府病院……31
慶明幼稚園……82

ゲストハウス　ブルーイングリーン……84
玄遠書道会……79
㈱ケントス……87
㈲剣持商会……83
㈲剣持保険事務所……66
㈲源和興業……80

こ

小泉教室　小泉綾子……57
㈱小泉中部……86
小泉バレエスタジオ……78
光果園……65
㈱光彩工芸……43
㈱甲州土木……34
㈱銀門会甲州リハビリテーション病院……63
河野スポーツ㈱……73
甲府朝日三郵便局……57
甲府愛宕町郵便局……75
甲府一高山紫会（昭和34年卒）……41
甲府一高昭和54年卒同窓会……31
甲府一高昭和55年卒同窓会……10
甲府一高昭和56年卒同窓会……5
甲府一高昭和56年・57年卒業　野球部無尽会……28
㈱甲府キンダイサービス……72
甲府警備保障㈱……65
㈱甲府建材商会……58
甲府紙器㈱……55
甲府城東郵便局……75
甲府城南病院……77
甲府信用金庫……35
㈲甲府スポーツ……82
甲府青果㈱……46
甲府倉庫㈱……50
甲府宝郵便局……75
甲府千塚町郵便局……75

甲府東光寺郵便局……75
学校法人甲府西幼稚園……77
甲府脳神経外科病院……39
㈾甲府凧月堂……25
甲府富士屋ホテル……19
甲府丸の内郵便局……57
医療法人立星会　甲府南ライフケアセンター……8
甲府山城郵便局……75
甲府ワシントンホテルプラザ……92
㈲弘法湯……70
㈱興龍社……65
宏和建設㈱……89
コーエー㈱……88
コーポ加久和……78
㈱KOGA……12
㈲五公建設……83
五光電工㈱……60
㈲小島精肉店……77
古寿園……81
㈱コスモエナジー……67
コスモ歯科矯正歯科医院……70
コットンクラブ……73
後藤歯科医院……91
㈱古名屋……39
小沼郵便局……76
㈱コバヤシ……93
小林運送㈱……85
小林歯科医院……70
㈲小林燃料店……73
小宮山外科医院……87
込山食品……85
小山医院……63

さ

㈲サイトウ機械製作所……73

OS・OM齊藤歯科医院……36
斉藤内科循環器科医院……58
三枝酒店……85
境川カントリー倶楽部……表4
㈲酒井プリント社……81
社会福祉法人　さくら会（風林荘）……90
㈲桜丘中央薬局……62
桜こどもクリニック……59
㈱サクラ電工……91
さくら不動産鑑定事務所㈱……84
㈲ささごん……87
㈲ササモトスタジオ……83
㈱サニート……78
佐野工建㈱……79
さの歯科医院……76
㈱澤田屋……55
さわ淵……60
㈲山軽自工……88
㈲サン構造エンジニアリング……69
㈲サンシチ……11
山日YBSグループ……表2

し

椎貝歯科医院……77
JMC甲府……61
JTB……84
Jプレス……86
塩沢木工所……80
シオジマ歯科医院……86
インプラントセンター　シキシマ歯科……70
寿司・割烹　治作鮨……58
㈱システムインナカゴミ……93
㈱シップス……81
㈲篠原電研……59
篠原貿易㈱……62

(株)島田貴金属店……29
清水クリニック……64
しみず歯科医院……83
(有)シミズ酒販……56
(有)清水ステンレス……73
いなり寿司　清水屋……81
シミックホールディングス(株)……50
(株)シャトレーゼ……91
(有)ジャパンアートメモリー……84
(株)シャルム……65
ジュースのわたなべ……92
(株)秀和工業……68
(株)ジュエリー寿々……69
順聖クリニック……54
(株)少國民社……23
[illegible]……[illegible]
[illegible]……[illegible]
[illegible]……[illegible]
[illegible]……73
昭和[illegible]歯科医院……82
食楽人……73
白須測量調査事務所……93
(株)白根アルミ……79
(株)白根ベニヤ……72
新藤歯科医院……70
食事処しんとみ……88
(株)新和運輸……83
(株)新和不動産鑑定士事務所……53

す

すが建設……91
杉田小児科医院……60
鈴木歯科医院……70
鈴木製菓(株)……83
スズ美容室……68
寿々屋酒店……89
鈴健興業(株)……85
須藤歯科医院……70
スナックペリカン……93
住友不動産(株)……92
角野歯科医院……82
住吉子供クラブ……85
Slow life……78

せ

学校法人聖愛幼稚園……78
清広苑……83
(有)静コーポレーション……80
正視堂眼鏡店……77
医療法人　正寿会……62
セコム山梨(株)……37
[illegible]甲府中央店・甲府美咲店……[illegible]
[illegible]セルセ……[illegible]
[illegible]連合会山梨県本部……[illegible]
[illegible]……69
(株)千[illegible]水産……76

そ

総合警備保障(株)山梨支社……86
総合メディカル(株)松本営業所……90
(株)ソネット……93

た

第一観光(株)……69
(株)大栄測量……83
大栄土木建設(株)……51
太冠酒造(株)……91
大正富山医薬品(株)……65
(株)大成電気……70
(有)大増興業……81
大丸商事(株)……24
(有)ダイヤ商事……49
(株)太陽社……89
大和ハウス工業(株)山梨支店……92
医療法人社団　高原会……34
医療法人悠紀会　武井医院……63
武井歯科医院……84
医療法人　武川会……44
竹そば……45
(株)たけまる……86
TATSUKAWA設計……92
田中会計事務所……52
(有)タナカ建機……78
田中歯科医院……76
田中水晶彫刻所……79
田中農園……88
(株)タナベエンジニアリング……[illegible]
[illegible]　田辺眼科[illegible]……[illegible]
[illegible]……[illegible]
[illegible]……[illegible]
[illegible]郵便局……75
(株)たまパッケージ……89
(株)タンザワ……47
ホテル談露館……94

ち

千野建材(株)……93
(株)中央カンテイ……20
中央歯科医院……72
(株)中央車輌販売……77
中外製薬(株)……91
(株)中部……85
(株)中部環境開発……80
ごはんBARちろりん村……89

つ

津久井胃腸科医院……59
露木耳鼻咽喉科医院……50
(株)鶴田不動産鑑定……55

て

TSプランニング……51
デイサービスセンターあさかわ……53
帝人ファーマ(株)……45
出井農園……68
てっぱん秀……81
(株)テレビ山梨……80
デンタルラボ島田……72
でんでん……68
(株)テンヨ武田……53

と

東海東京証券(株)甲府支店……85
東京セキスイハイム(株)……43
東京地方税理士会・甲府支部　日新会……3・4
東八商事[illegible]……[illegible]
[illegible]洋測量設計(株)……[illegible]
(株)東和[illegible]……84
(有)都市[illegible]……89
土橋特許事務所……90
(株)トミオカテニス……72
富竹歯科医院……83
(有)トムス・エンタープライズ……81
(有)トラストクリエーション……81
(株)鳥林……37
とんかつ　まるじゅう……74
COFFEE LOUNGE　どんぐり……68
萄pe'溜……79

な

内藤歯科医院……76
(株)内藤ハウス……46
内藤セイビドー眼鏡店……74
(有)中川看板店……77
ナカキンリース(株)……86

中込会計事務所……89
中込建設工業㈱……46
そば・うどん　なか澤……69
中澤経理事務所……49
なかざわ歯科医院……70
中沢歯科医院……77
㈱中沢薬局……27
ながせき頭痛クリニック……38
㈱仁明会ながまつ医院……58
㈱中村建設……41
なかむら内科クリニック……77
中村保長税理士事務所……79
㈱中家製作所……48
㈲名取自工……80
七沢歯科医院……72

に

２０１ゴルフ会……71
㈱日医工山梨……46
日眼甲府薬局……54
社会福祉法人　日新会……47
日進珠算教室……79
日東金属㈱……90
二宮眼科医院……77
㈱日本旅行甲府支店……83
㈱ニュースメディア甲府……88
ニュー芙蓉……74
㈱ニュー平和……81
ニューロン製菓㈱……56

ね

ネッツトヨタ甲斐㈱……9
ネッツトヨタ山梨㈱……58

の

ノア動物病院……61
のざわ耳鼻咽喉科クリニック……57
のぞみ薬局……90
㈱野中……68
㈲野中製材所……66
ノバルティスファーマ㈱……86
野村証券㈱……44

は

㈱ハートフルスタッフ……87
㈱ハウスメイトパートナーズ山梨支店……79
㈱はくばく……52
畑歯科医院……73
羽中田歯科医院……77
花形歯科医院……90
ばば歯科医院……36
㈱馬場設計……75
浜田測量・登記事務所……89
早河歯科医院……53
疾測量㈱……42
㈱早野組……6
原歯科医院……90

ひ

㈲ピアジュエリー……21
㈲ピーチ専科ヤマシタ……81
東浦澄夫……71
樋口歯科医院……77
日向山仏舎利平和宝塔……51
㈲日之出食品……80
ひはらクリニック……36
㈱ひまわりサポート……35
㈱平塚メディカル……56
㈲ヒロキハウジング……68
廣瀬醫院……21

ふ

㈱ファースト・エンジニアリング……80
ファミーユ……88
㈱フォネット……38
富岳物産㈱……26
深澤会計事務所……85
フカサワ歯科……82
串揚げ深澤亭……85
深澤内科クリニック……87
福田歯科……82
富国生命保険相互会社……30
富士急行㈱……41
富士島建設㈱……45
㈱藤二誠……27
藤原医院……58
富士見歯科医院……86
フジモリ歯科医院……86
京呉服ふじや……67
㈲藤レンツ……57
藤原整形外科……75
フラミンゴガーデン……89
フラメンコスタジオ　LO　ANDARE……71
プリンハウス……40
㈲古屋クリーニング工場……64
古屋歯科医院……87
㈱古屋装身具商会……83
㈱フレアス……64

へ

ヘアーメイクRUSTIC……82
平成3年卒7人の何某……62
ベルクラシック甲府……66

ほ

㈲宝亀……74
㈲豊和興業……74
㈲北宝エステート……92
保坂歯科医院……70
保阪歯科医院……83
保坂メディカルクリニック……92
細田眼科医院……56
Hops & Herbs……42
㈱ほていや……73
ホテル平安……39
堀内貴石……82
堀内整形外科医院……56
堀内平嶋法律事務所……82
㈲堀内文光堂……86

ま

マコト医科精機㈱……26
政門石材店……87
旬料亭　まつ川……71
松中商店……93
㈱マリアージュ……18
㈱マルエスフリージングジャンクション……75
丸十山梨製パン㈱……92
㈱マルモ……49
マルヨシ自動車……78

み

御崎神社……82
水上タイヤ商会……78
三井クリニック……66
三井歯科医院……76
三井住友海上火災保険㈱……64
㈱三井住友銀行……36
三塚歯科医院……70
三菱UFJモルガン・スタンレー証券㈱……63
薬袋レディースクリニック……66
NPO法人南アルプスファームフィールドトリップ……86
㈱湊與……62
みのり運輸㈱……69
㈱未来不動産鑑定……54

む
村松歯科医院……76
め
㈱メイキョー……54
明和工業㈱……59
メガネ時計タナカ……58
メディックス㈱……80
も
望月耳鼻咽喉科……72
望月・雨宮会計事務所……40
望月歯科……76
モテギ㈱……43
モトウエスト……92
㈲森田運送……84
や
八木建設㈱……42
焼肉ひろや……68
八雲製菓㈱……34
厄除地蔵尊　塩澤寺……71
矢崎家具……70
矢崎耳鼻咽喉科医院……82
㈱やさしい手甲府……30
柳町法律事務所……64
㈲柳屋……71
㈲山一運送……84
㈱山市成工……68
山一窯業㈱……83
山内歯科医院……71
山紘会……表3
山梨ＹＭＣＡ……65
山梨ガーデン㈱……85
山梨県厚生農業協同組合連合会……60
山梨県国民年金基金……91
一般社団法人山梨県食品衛生協会……88
山梨県信用農業協同組合連合会……60
山梨県弁護士会……16
山梨県木材製品流通センター協同組合……79
社団法人倫理研究会　山梨県倫理法人会……75
山梨厚生会……22
山梨交通㈱……50
山梨品川燃料㈱……61
山梨信用金庫……22
山梨中央青果㈱……55
㈱山梨中央銀行……38
山梨燃料㈱……68
㈱山梨不動産鑑定所……35
山梨万年筆商会……79
山梨森紙業㈱……72
山梨郵便局……81
山梨落語研究会……77
㈲山村電気工業……69
箭本外科整形外科医院……69
ゆ
㈱ユーティーワイ企画……72
㈱有電……74
雄飛会（昭和37年卒）……1・2
ホテル湯王温泉……68
ユタカ電気㈱……63
湯殿館……56
医療法人八香会　湯村温泉病院……38
㈱湯村自動車学校……53
湯村郵便局……76
㈱夢や……62
よ
㈲要害温泉……23
ＹＯＳＨＩ……53
医療法人和州会　吉田医院……53
㈱依田組……64
依田酒店……81
依田歯科医院……90
㈲依田水産……80
㈱米山住研……86
読売センター甲府駅北……68
ら
ライゼ……91
ラウンジリール……71
ラウンジ　レオ……82
㈱ラッキー商会……32
割烹処　江戸前鮨　藍花……89
り
リーチ英会話教室……88
㈲リアライズ……24
リカーショップＮＡＧＡＳＡＷＡ……72
㈱立地企画……39
㈱仁和会　竜王リハビリテーション病院……45
竜王レディースクリニック……54
㈲旅館明治……71
れ
レストランバーＳＡＩＫＩ……74
連合山梨……92
ろ
ロイヤルモデル……92
㈱ロード……55
わ
㈱ワイ・イー・エス……86
㈱ＹＳＫｅ－ｃｏｍ……42
歯科若尾……67
わん画家工房……76
チケット裏
身延山病院

第一三四周年甲府中学・甲府一高同窓会
学年協賛者氏名

【1組】

小笠原　寛
横山　哲也
桜　伸一郎
小野　泰史
上田　俊彦
窪田　哲也
名取　義仁
山田　浩
鈴木　一
薬袋　正和
田中　由夫
芦澤　仁
中野　真
本田　隆美
近藤　隆
古屋　秋雄
野沢　清次
飯島　直己

【2組】

磯部　正
網野　進
中山　辰人
飯野　信一
廣瀬　乾三
櫻田　みち子
飯沼　典子
原田　一郎
數野　真裕美
長田　登喜広
唐釜　智子
平澤　美恵
志村　文久
大島　佳子
輿石　修
佐野　武
丸山　憲一
脇嶋　博美
佐藤　清子
丸山　治彦
小山　武彦

【3組】

小泉　一昌
末木　浩久
吉澤　直人
古川　正仁
森田　忠宏
野田　菊男
関本　正史
村上　麻里
矢野　賢次
篠原　学
山下　暁史
佐野　厚子
望月　浩
小林　靖
志村　仁史
北野　礼次郎
望月　理恵
勝俣　真寿美
田中　真也
八田　政久
井上　香
早河　貴代美
飯野　敬子

【4組】

木村　充子

西山宏
松川裕子
佐野葉子
小林英子
古屋賀章
佐藤由美
内藤智司
清水賢一
雨宮和久
平山美香子
宇野澤美穂
名取宏美
尾澤一誠
小倉賢二
石川等
中込誉世夫
伊東尚子
村松訓
桐畑美登利
降矢恵子
吉岡由理
野沢知永

【5組】

向山雅代
三井裕美
砂田香利
千島昌美
岡真千恵
花輪ゆみ子
中込政子
望月富美
溝口弘美
増村双葉
宮原智恵子
政門博子
中嶋優子
長沼美代子
市川ちづる
山田成子

【6組】

雨宮利之
藤原辰巳
伊藤甲一

深澤英子
丹沢竜
鈴木天洋
深沢千春
酒井信
中澤順子
吉田貴
土屋淳
中込浄美
石井美幸
高橋信枝
古屋道彦
中澤伸宇
雨宮久和
田中聡
伊藤秀
佐野章子
高橋賢

【7組】

斉藤武彦
三井伊春
三井都奈美
小林慶子

細田千恵子
加賀美宏
杉山誠
大森静子
伊藤兼博
太田清士
矢島清文
田中一臣
前田和彦
鈴木哲也
奈良田伸司
飯沼秀司
遠藤哲
土橋しづ恵

【8組】

長田文子
池口和美
須貝好
日原和巳
畑中祐三子
対比地ゆかり
雨宮ミキ
川窪美香

赤松美樹
面高篤子
荻原房江
中川美穂
豊田美江
松島貴子
山下一二三
鈴木由佳
雨宮佐知子
中村由美子
小泉光世
尾嶋千恵子

【9組】

平澤由美
清水友子
今村定弘
篠原永久
山本雄一
米山清美
若林幸江
佐竹滋子
小澤　明
樋口尚美

清水江理子
柳沢秀樹
鈴木紳司
石井孝明
石橋弘基
伊東孝子
山口由美子
有泉　克
小澤道子
寄特美佐子
小林和仁
後藤久恵
河西香織

（順不同・2014・4・16現在183名）

第一三四周年甲府中学・甲府一高同窓会実行委員会組織

実行委員長　吉澤　直人（3組）
実行副委員長　古屋　賀章（4組）
事務局長　三井　裕美（5組）
チケット部会長　雨宮　利之（6組）
広告部会長　古屋　賀章（4組）
会場部会長　廣瀬　乾三（2組）
記念誌部会長　酒井　信（6組）
総務担当長　小林　英子（4組）
広報ＩＴ担当長　小野　泰史（1組）
強行遠足担当長　藤原　辰巳（6組）
東京部会　中山　辰人（2組）

幹事長　太田　清士（7組）
事務局長　石井　孝明（9組）
幹事　上田　俊彦（1組）

平成11年卒
幹事長　北川　雄一（1組）
事務局長　江原　大輔（3組）
幹事　数野　優（8組）
幹事　羽田野由基（6組）
幹事　守屋　若奈（4組）

―編集後記―

「おもしろきことも無き世をおもしろく」私の座右の銘であり、高杉晋作が残した名言です。実行委員会の活動は、苦労も多かったけれど、それを上回って余りある楽しい思い出ができました。この思い出をくれた母校の歴史と伝統、同級生、同窓生の皆様にただただ「感謝」の一言あるのみです。そして今、気持ちも新たに「つなげよう感謝の歩み」、今年の強行遠足が楽しみです。

（事務局長　雨宮利之）

今こうやって編集後記が書ける状態にあることに、ひとまずホッとしています。五〇歳という節目に回る一高同窓会幹事の仕組みは絶妙です。子育てのピークを越えて、昔の平均寿命まで生きて、残りの時間に向けて…。大きな節目とも言えるこの一年間に行われた旧友や諸先輩方との共同事業は、様々なヒントを与えてくれたような気がします。さて、後輩への引き継ぎだけはちゃんとして、とりあえずビール…行きますかあ。

（チケット部会長　古屋賀章）

学生時代アメリカングラフィティーとかバック・トゥ・ザ・フューチャー等の映画の五〇年代の風景は遠い遠い昔の話と思って観てましたが、あの頃の五〇年代は今なら八〇年代にあたるわけで、あらそんな昔の話でもなかったんだなぁ…って。そういえばあの頃の五〇歳も凄いおじさん・おばさんだったけど、なってみればまだまだ若いですよね。同窓会でそんな時の流れを肴に楽しんで頂けたら嬉しいです。

（広告部会長　廣瀬乾三）

卒業後、甲府一高同窓会チケットは毎年買ってきた。四八歳の年、二年後は幹事だよと言われ、初めて同窓会に参加した。五〇歳の年、いよいよ幹事の年。同級生が集まり打ち合わせをするようになった。今まで携帯電話のアドレス帳には、仕事グループの連絡先が多かった。最近、友人グループの連絡先が増えてきた。これからの人生の楽しみが増えた気がする。

（会場部会長　酒井　信）

今回昭和五七年卒が同窓会幹事となった事で、同級生に久々に会うことが出来とても嬉しく思っております。今後は、再び会うことが出来た校友を大切にし、今後の人生を送れたら幸せだな～と感じています。

（東京部会幹事長　太田清士）

私どもの時代は通信メディアが飛躍的に成長し、それと共に個人情報への意識や警戒が強まっていく丁度その入口の時代に高校生活を迎えました。手軽さもありますが逆に身近に感じてしまうからこそ疎遠になってしまう人が増えたのも事実です。そんな中で実際に顔を見てコミュニケーションを取る機会をずっと続けてきて下さった同窓会の皆様に感謝の意を込めてこの会を精一杯楽しみたいと思います。

（平成一一年卒幹事長　北川雄一）

高校三年生の時、私達は同級生を突然の心臓発作で失った。その知らせを聞いたときの衝撃を今も忘れない。思い出す彼の顔は若い日のままだが、五〇歳の彼が今もどこかにいるような気がする。彼だけではなく、卒業後には何人かの仲間と恩師が鬼籍に入った。その人たちの分まで生きると言うには一人一人の人生は重すぎる。けれど、忘れない。この記念誌を彼らに捧げたい。

（記念誌部会長　小林英子）

五〇になった。苦かったはずの想い出も、炭酸飲料のように思えてくる。旧友に再会したら、なんと声をかけるか。「アー・ユー・オーライ?」きかれたら、どう答えるか。僕なら答えは決めてある。

「イエス、アイム・オーライ」これなら、いつでも、だいじょうぶ。

（記念誌部会　雨宮和久）

～当番幹事、一高へご恩を「倍返し」～「いつ、やるの?…今でしょ!」を座右の銘に準備を頑張りました。また、強行遠足では佐久穂検印所で手伝いを初体験、男子の闘う姿を目の当たりにし「ジェ、ジェ、ジェ!」一高男子の偉大さを痛感しました。そして五月一七日同窓会当日は感謝をこめた「おもてなし」。一高バンザーイ、同窓会バンザーイ、team57バンザーイ（二〇一三年流行語大賞引用）

（記念誌部会　雨宮ミキ）

記念誌編集にたずさわり様々な気づきがあった。一高現役生当時、目標を目指してもがいていたこと、友との何気ない会話、恩師の励ましの言葉…。単なる「思い出」として封印するには惜しいかけがえのないもの、思いはこれからも私たちの心の中で生き続けることでしょう。

（記念誌部会　松川裕子）

第134周年 甲府中学・甲府一高同窓会　つなげよう 感謝の歩み

発行日：平成26年5月17日　発行：第134周年甲府中学・甲府一高同窓会実行委員会
編集：記念誌部会　デザイン：細田裕美　制作・印刷：株式会社　少國民社

祝134周年

昭和５７年卒　山紘会

私たちは甲府一高を応援します！

山紘会

飯野信一	飯沼典子	大島佳子
数野真裕美	唐釜智子	輿石　修
小林和仁	櫻田みち子	佐野　武
佐藤清子	原田一郎	廣瀬乾三
1982	脇嶋博美	丸山憲一

【恩師】　山本紘治先生

甲府盆地を一望できる最高のロケーションで最高のショットを！

四季折々の眺望と
魅力いっぱいのコースレイアウト
思う存分にゴルフを楽しんでいただけます。

境川カントリー倶楽部
〒406-0851 山梨県笛吹市境川町小黒坂2266
TEL.055-266-5012 FAX.055-266-4689
URL http://www.sakaigawacc.com